松浦市文化財調査報告書　第３集

下田遺跡

１９８７

松浦市教育委員会

題　字

松浦市教育長　呼子　俊一

松浦市文化財調査報告書　第３集

下　田　遺　跡

１９８７

長崎県松浦市教育委員会

発刊にあたって

近年、当市でも地域の開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査が増加しています。こんななかで、このたび、昭和61年度の国庫・県費補助を受けて、松浦市星鹿町下田免に所在する下田遺跡の範囲確認調査報告書を刊行することになりました。

当市星鹿半島一帯は、鎌倉時代に２度に渡った元寇によって、大打撃を受けた所であります。これにまつわる地名や千人塚という戦死者を葬った塚も６ヶ所ほど残っております。これ以前の星鹿半島の状況はよくわかっていませんでした。しかし、今回の下田遺跡の発掘調査は、その空白の歴史を埋めるには十分な資料を提供してくれました。少量ながら旧石器時代の遺物であるナイフ形石器や台形石器が存在し、確実にこの地が約１万５千年前にさかのぼっての人間の生活の舞台であったことが裏付けられました。

本報告書は、その調査結果についてまとめたものであります。

今後、本報告書が地域住民の“埋蔵文化財”に対する関心と理解を深め、学術研究の基礎資料になれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査にあたり、長崎県教育委員会および地元の作業員の皆様、また、ご協力をいただきました関係の皆様方に対しまして厚く感謝を申し上げます。

昭和62年３月

松浦市教育長　呼子俊一

例　　言

1．　本書は、昭和61年度に実施した松浦市星鹿町下田免460番地ほかに所在する下田遺跡の範囲確認調査報告書である。

2．　調査は、昭和61年度の国庫補助および県費補助を受けて松浦市教育委員会が実施した。

3．　発掘調査は、松浦市教育委員会が主体となり、社会教育課主事の中田敦之があたった。

4．　本書の執筆に際しては、県文化課久原巻二氏に「松浦市域の地形的環境」と題する玉稿を賜わった。

5．　遺跡の実測、写真撮影は中田が行い、トレースは山崎みどりの協力を得て中田が行った。

6．　出土遺物は、現在松浦市教育委員会が保管している。

7．　本書の編集は中田が行った。

本　文　目　次

頁

Ⅰ　序　　説 …… 1～2
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．発掘調査の経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置 …… 3

Ⅲ　松浦市域の地形的環境 …… 4～8

Ⅳ　星鹿半島の遺跡と遺物 …… 9～20

Ⅴ　発掘調査 …… 21～32
　1．調査の概要 …… 21
　2．土　層 …… 21～24
　3．遺　構 …… 24～26
　4．遺物の出土状況 …… 27～28
　5．出土遺物 …… 28～32

Ⅵ　下田遺跡表採資料について …… 33～37

Ⅶ　調査のまとめ …… 38

付編　星鹿周辺の地名と歴史 …… 39～40

挿　図　目　次

頁

Fig. 1　松浦市位置図
Fig. 2　遺跡の位置図（1／5,000）……3
Fig. 3　松浦市域の地質図……5
Fig. 4　松浦市域の起伏量図……7
Fig. 5　松浦市域の高度頻度曲線と高度帯別遺跡分布……8
Fig. 6　周辺の遺跡（2／3）……13
Fig. 7　周辺の遺跡（1／2）……14
Fig. 8　周辺の遺跡（1／2）……15
Fig. 9　周辺の遺跡（2／3）……16
Fig. 10　周辺の遺跡（1／3）……17
Fig. 11　星鹿半島遺跡地図（1／25,000）……18
Fig. 12　調査区設定図（1／750）……22
Fig. 13　土層図（1／40）……23
Fig. 14　井戸状遺構実測図（1／20）……25
Fig. 15　No 4 トレチン遺構配置図（1／40）……26
Fig. 16　No12トレンチ平面図・土層図（1／40）……28
Fig. 17　No12トレンチ出土遺物（2／3）……29
Fig. 18　No15トレンチ出土遺物（2／3）……30
Fig. 19　No13・4トレンチ出土遺物（2／3）……31
Fig. 20　下田遺跡表採遺物　①（2／3）……34
Fig. 21　下田遺跡表採遺物　②（2／3）……35
Fig. 22　下田遺跡表採遺物　③（2／3）……36

表　目　次

Tab. 1　星鹿半島遺跡一覧表……19
Tab. 2　出土遺物一覧表……27
Tab. 3　出土遺物計測表……32
Tab. 4　表採遺物計測表……37

図 版 目 次

頁

ＰＬ．１　遺跡遠景（星鹿城山より）……43
ＰＬ．２　調査風景……43
ＰＬ．３　No12トレンチ土層状況……44
ＰＬ．４　No13トレンチ土層状況……44
ＰＬ．５　No14トレンチ土層状況……45
ＰＬ．６　No15トレンチ土層状況……45
ＰＬ．７　井戸状遺構検出状況……46
ＰＬ．８　井戸状遺構検出状況……46
ＰＬ．９　井戸状遺構検出状況……47
ＰＬ．10　井戸状遺構検出状況……47
ＰＬ．11　溝状遺構検出状況……48
ＰＬ．12　溝状遺構・竪穴検出状況……48
ＰＬ．13　遺物出土状況……49
ＰＬ．14　遺物出土状況……49
ＰＬ．15　出土遺物（１／１）……50
ＰＬ．16　出土遺物（１／１）……51
ＰＬ．17　出土遺物、表採遺物（１／１）……52
ＰＬ．18　表採遺物（１／１）……53
ＰＬ．19　表採遺物（１／１）……54
ＰＬ．20　周辺遺跡出土遺物（２／３）……55
ＰＬ．21　周辺遺跡出土遺物（２／３）……56
ＰＬ．22　周辺遺跡出土遺物（１／１）……57
ＰＬ．23　星鹿半島津崎一帯……58
ＰＬ．24　星鹿千人塚……58
ＰＬ．25　墓址検出状況……59
ＰＬ．26　埋めもどし風景……59
ＰＬ．27　発掘に参加した人々……59

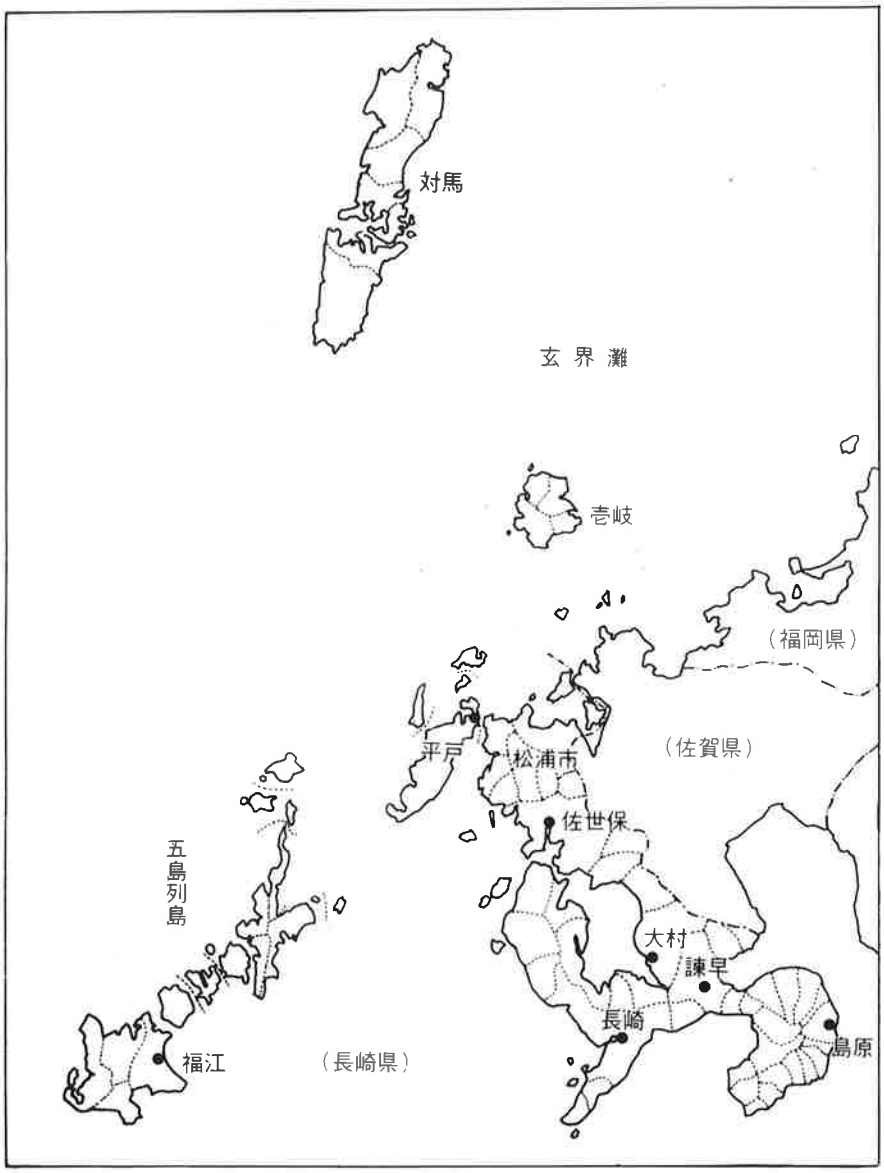


Fig. 1　松浦市位置図

Ⅰ　序　説

1．調査に至る経過　昭和39年から松浦高等学校教諭に赴任した故芝本一志氏を中心とする郷土社会部は、松浦の歴史をひもとく考古学的な資料の作成をめざして市内各地で踏査を行い、遺物の採集を続けていた。

下田遺跡もこれらの活動の中で発見された遺跡で、ナイフ形石器・石刃・石鏃・掻器が採集されていた。しかし、昭和48年に長崎県教育委員会が行った遺跡周知事業には確認されておらず、遺跡地図にも記載されていなかった。

昭和56年、長崎県教育委員会が行った遺跡周知事業の再調査においては、松浦市でも現地踏査の結果64ヶ所の遺跡が確認されている。その結果が昭和58年「松浦市遺跡地図」として発行されている。下田遺跡は、この昭和56年度の踏査で再発見された遺跡である。文化財包蔵地カード（８－42）では、星鹿町下田免465番地にて黒曜石原石、凹石、時期不明土器が採集されたと記載されており、遺跡の所在が確認されている。

松浦市においては、昭和60年度よりスポーツの振興をはかるため、町単位における地域運動場の計画が進められている。当星鹿町においても運動場建設の計画が立案されており、予定地内には下田遺跡の所在が周知されていた。計画地域が広範囲におよぶことから、また遺跡周辺が宅地造成による自然地形の破壊が著しいため、昭和61年度において、範囲確認調査の実施を計画した。幸い文化庁・長崎県教育委員会の理解が得られたため、昭和61年度の国庫・県費補助事業として発掘調査を行うことになった。

2．発掘調査の経過　発掘調査は、昭和61年度の国庫・県費による補助事業として実施し、長崎県教育委員会の指導を受けて松浦市教育委員会が主体となって行った。調査は、９月４日より10月３日までの約１ヶ月間実施し、大きな成果を得ることができた。調査した面積は187㎡であった。

調査は、前半は畑地にトレンチを設定し、後半は荒地にトレンチを設定して、遺構・遺物包含層の有無と遺跡の範囲などの確認調査を中心として掘り下げを行った。この間に地形測量を行った。

発掘調査がスムーズに進行することができたのは、多くの方々の協力のたまものであり、下記に記して御礼を申し上げます。

調査関係者　（敬称略）

調査総括　呼子　俊一　松浦市教育長
浦上　恒男　松浦市教育委員会教育次長兼学校教育課課長
福本　政二　松浦市教育委員会社会教育課課長

調査指導　長崎県教育委員会

調査事務　橋口　　達　松浦市教育委員会社会教育課次長
中別府恭博　　〃　　〃　　社会教育主事
神田　泰善　　〃　　〃　　〃

調査担当　中田　敦之　松浦市教育委員会社会教育課主事

調査協力　松浦市教育委員会社会教育課職員
松浦市立星鹿小学校
松浦市建設課

作 業 員　岩永文子・大石ミツエ・大野シオミ・大野ユキ子・小浦良子
白石英敏・泊　妙子・中川サチ子・引地シモ・前田五子・
前田イネ子・前田公彦・松田マリ子・山口ジツエ・山本宗市

内業協力　山下みどり・山崎みどり

Ⅱ　遺跡の位置

(Fig.　2)　　遺跡の所在する星鹿半島は、松浦市北西部の玄界難に面し、北方に突出した標高約40ｍを最高とする丘陵地より形成されている。先端部東側には標高125.6ｍのトロイデ式火山の城山(じょうやま)があり、一帯は北松県立公園に指定されている。半島のほぼ全域は水田、畑地として開墾されており、南側の牟田地区の水田地帯は、古くは東側奥深く発達したラグーンを形成していたが、現在は星鹿半島でも有数の水田地帯となっている。城山に接して東側には星鹿港があり、南側には青島航路の発着場である御厨港を擁している。

下田遺跡は、星鹿半島の北側海岸部近くの星鹿港を見おろす標高11ｍから17ｍの丘陵地に位置し、松浦市星鹿町下田免460番地ほかに所在する。遺跡に接近して、市立星鹿保育所・星鹿小学校・星鹿郵便局・星鹿町警察官駐在所・羽黒神社などがある。

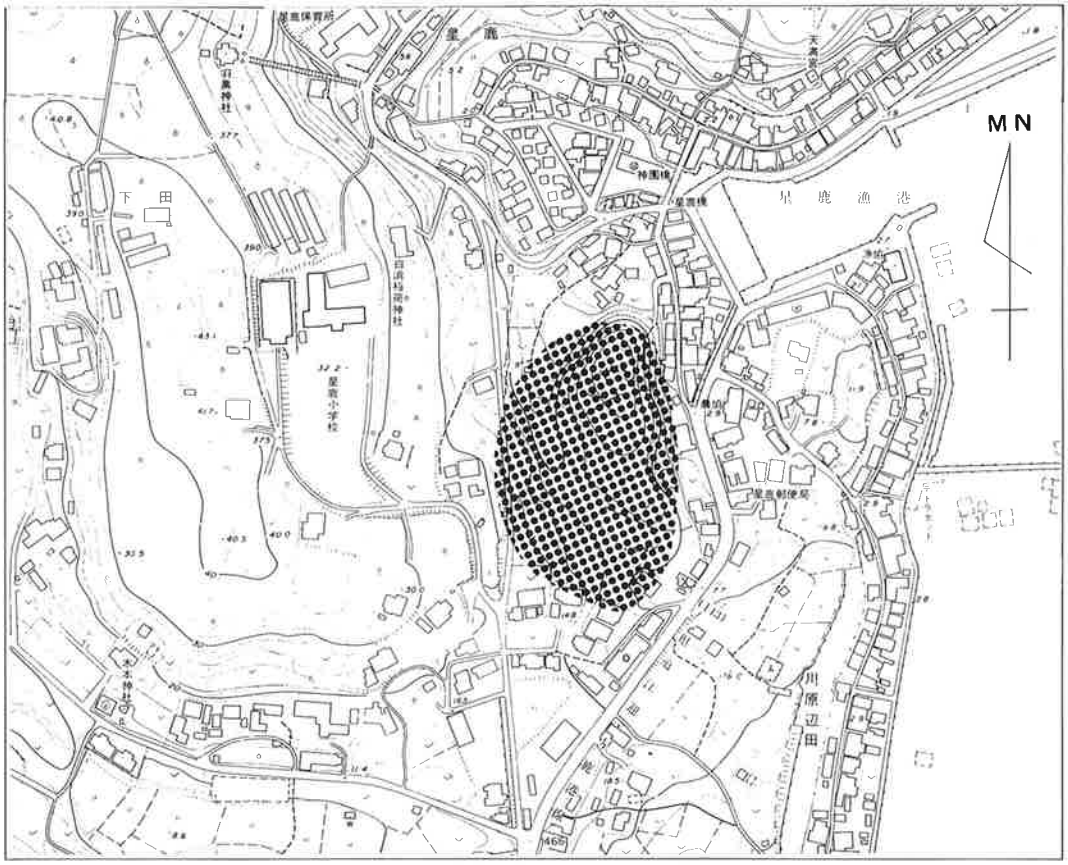


Fig.　2　遺跡の位置図（1／5,000）

Ⅲ　松浦市域の地形的環境

松浦市は、北松浦半島の北部とその沖に浮ぶいくつかの属島とからなっている。

北松浦半島は、九州島の西北端に突出した肥前半島から派生した半島で、伊万里・早岐間の構造谷より西北方にあたる。この構造谷に沿う国見山（777m）を最高峰とし、北と西とに高度を逓減しながら海へ没し、九十九島などの水平肢節の極めて大きい沈降海岸をつくっている。

半島の地形は、玄武岩の溶岩台地、第三紀層のゆるやかな起伏をもった山麓と平野とに大別できる。

溶岩台地は、佐賀県との境をなす国見山・八天岳から隠居岳へと南北につづく稜線が最も高く、平頂性の山地をなしながら西北へゆるく傾斜している。この山地をつくる玄武岩類は、松浦玄武岩や西岳玄武岩とも呼ばれ、半島内に広大な範囲にわたって分布する。西彼杵半島、東松浦半島や沖に浮ぶ島々にもみられる。もとは伊万里南方の黒髪山付近を火口として噴出した大火山（西岳楯状火山）であったとされる。第三紀の終りごろ数回にわたって噴出し、何段かに分類できる台状火山を形成した。その後の侵食によって、いくつかの山地列に分断されたり、孤立丘となっている。山頂部には堆積原面の平垣部をもち周囲が急崖になったテーブル状のもの、さらに侵食が進んで平坦部を失い尖峰となったものなど特有の山地形をしており、前者がメサ、後者がビュートと呼ばれる。

玄武岩台地周辺のきり立った断崖の直下には、ゆるやかな山麓地形が発達している。これは砂岩、泥岩の互層の第三紀の堆積岩からなり、かつての北松炭田は、この夾炭層を利用していた。上位の玄武岩と作用して、「北松型地すべり」が多発することでも知られる。玄武岩と第三紀堆積岩との間には、八ノ久保砂礫層がはさまれ、豊富な湧水がある。この山麓面は、第三紀層の堆積が終ったころ地盤変動や侵食作用を受けて、平坦化され、さらに沈水して浅海の条件下で八ノ久保砂礫層を堆積した。その後伊万里、有田方面に大きな隆起量をもって上昇し、傾動地塊となり、さらにその上に玄武岩が噴出している。山麓面の末端は、九十九島の多島海となっている。

半島内には平地が少なく、佐々川・相浦川や志佐川などの中小の河川があり、細長い低平地をつくっているにすぎない。河川のつくる河系模

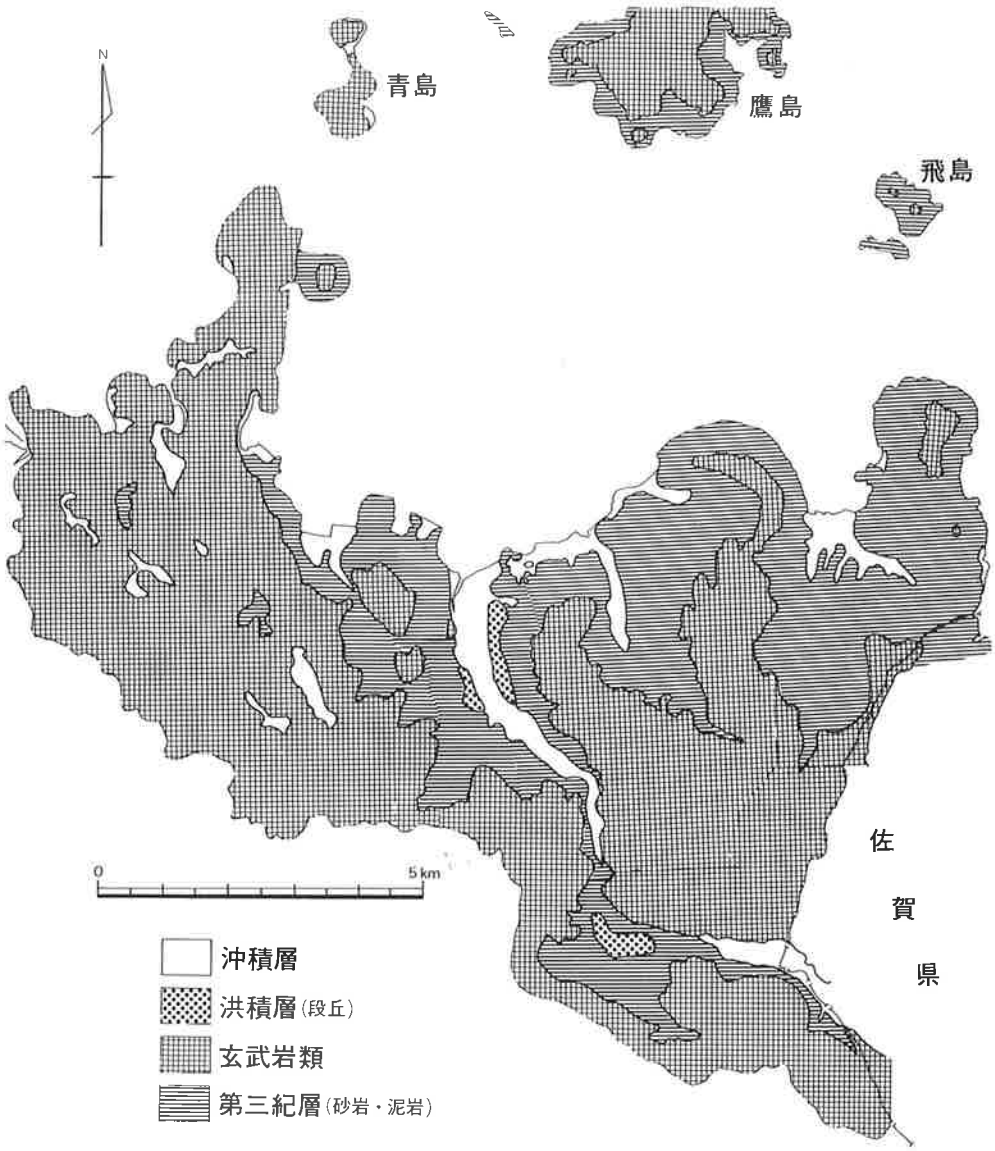


Fig. 3　松浦市域の地質図

様をみると、ほぼ格子状となっており、断層線に制約された直線的な河流が多いことがわかる。これらの断層起源と思われる谷によって、半島内は小さな地形区に分類できる。

松浦市の地勢は南高北低をなし、河川も全て北流している。市内も、玄武岩台地、第三紀層による山麓、さらに平地と地質にもとづく地形に分類できる。全体に山がちで、低平地は少ない。

松浦市内でも玄武岩台地の占める面積が大きい。志佐川以東の玄武岩台地は、県境の国見岳（495.9m）を中心とした山塊で、国見岳から3つの支脈が派生している。最も東には、国見岳から北北東へ人形石山、石倉岳へとつづく平頂性の山地列がある。さらにその北には、梶谷城のある城山と金井崎の半島中央部とに、分断されてビュート、メサとなったものがある。中央の支脈は、今福川と調川川とにはさまれたもので、国見岳から北へ台地がつづき、調川町平尾へと至っている。3つ目は、石盛山・豆五郎山そして不老山へとつづくものである。志佐川の左岸に沿っては、大阪山・高法知岳などの玄武岩台地が細長くつづく。以上の台地は標高が高く、周囲の崖も急で、志佐川には300mもの崖が迫っている。

これに対して悪太郎川以西の台地は、低位の溶岩台地が広く、白岳と大岳の二重構造の台地がビュート状に高まりをなしているだけである。この低位台地は、竜尾川・加椎川や坂瀬川の浅い谷に刻まれ、丘陵状となっている。星鹿半島もこれにつづく低い台地で、城山山頂にも玄武岩がのっている。津崎鼻や波津崎の海食崖には、玄武岩の柱状節理が発達している。青島は玄武岩台地からなる島で、飛島の山頂にも玄武岩がのっている。

第三紀層の堆積岩は、松浦市の基盤をなし、なだらかな丘陵地形をつくっている。今福町寺上（げ）・木場、調川町平尾・下免・中免・白井・平原、志佐町池成や西山などには平坦面が広く、上位の玄武岩台地の侵食によって顔を出したかつての準平原遺物である。またこの平坦面上には、玄武岩が崩落して崖錐状の斜面地となっているものもある。玄武岩台地との傾斜変換点近くには溜池が多く、山麓面以下には棚田が発達し、玄武岩台地上の畑地と対称的である。

市内は低平地に乏しく、河川や海岸に沿って細長い平野がみられるだけである。なかでも市内第一の長流志佐川が、最も広い平地を提供している。佐賀県側の国見山系に水源をもち、長さ11.5km、流域面積45.0km²を測る。長野・稗木場・高野・里や上野付近には、河岸段丘もみられる。

竜尾川は、白岳北麓に源をもち、長さ5.1km、流域面積17.4km²ある。支流を集めて北へ緩流し、河口は三角江をつくる。志佐川に比べ、深い谷は発達していないが、田代などに広い侵食盆地をつくっている。市内の諸河川は、地形の最大傾斜や第三紀層内の断層線に支配されている。縦断面図をつくってみると、中下流に遷移点があり、汎沈水地域にあり

Fig. 4　松浦市域の起伏量図

ながら、隆起していることを示している。

(Fig. 4)　　これは、市内の状伏量を図化したものである。玄武岩地の急崖は、30°以上の急斜面となり、御厨から星鹿の台地や第三紀丘陵は、10°以下の緩斜面となっている。市内の旧石器～弥生時代の遺跡を、この図に示した。ほとんどが10°以下の平坦地に占地し、20°以上の地域にはない。

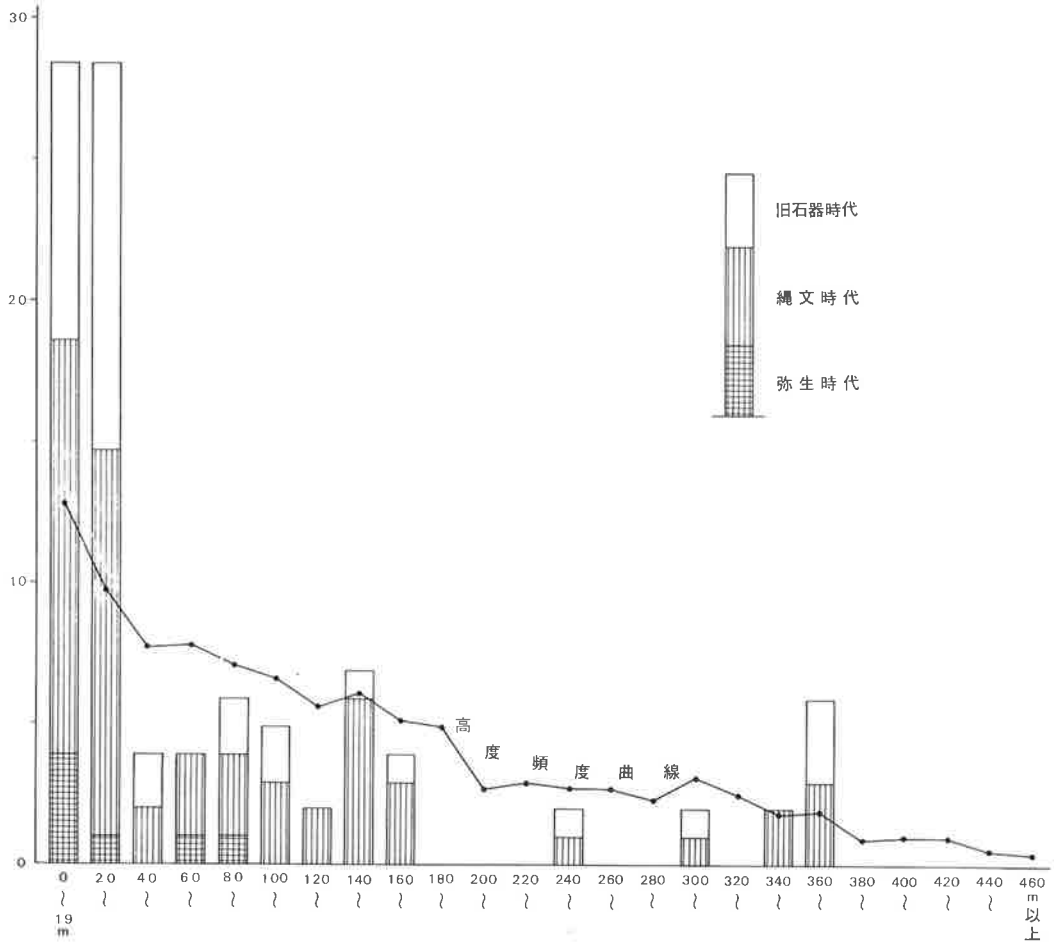


Fig. 5　松浦市域の高度頻度曲線と高度帯別遺跡分布

特に星鹿半島から御厨町北部の低位溶岩台地に濃密である。

(Fig. 5)　これは、市内の高度頻度曲線と高度帯別遺跡分布を示したものである。高度頻度は、ほぼ一般的曲線を描いているが、低位溶岩台地や第三紀丘陵に相当する60～200mの部分、溶岩台地平頂部に当る300～380mの部分の比率が高い。遺跡は、旧石器時代37、縄文時代58、弥生時代7、のべ102を数える。そのうちの57%が39m以下にある。200m以上の高標高域には8遺跡あり、全て溜池周辺である。玄武岩台地を刻む浅い谷の、湧水の豊かな谷頭に占地している。

松浦市内の地形は、第三紀層の山麓と玄武岩台地とで特徴づけられ、遺跡の立地もこれら地形の意識的利用の結果と考えられる。

Ⅳ　星鹿半島の遺跡と遺物

(Fig. 11)
(Tab. 1)

星鹿半島には、旧石器時代から近世に至るまでの多くの遺跡が分布している。その中の遺跡として今回の発掘調査を行った下田遺跡もあげられる。

星鹿半島における遺跡数は、下田遺跡を含めて23ヶ所が知られている。これらの遺跡においては採集および出土品について若干の報告がされている。ここでは、半島一帯に分布する遺跡を取り上げて当遺跡との関連を述べていきたい。

(Fig. 7・10)

1．池田遺跡（御厨貝塚・池田下遺跡）

下田遺跡の南方約1.5㎞の御厨港を見おろす標高20ｍの丘陵地に位置する。主として弥生時代の遺物が認められる。

この遺跡については、大正14年に前田毅氏による発見報告がある。同報告には、貝塚および遺物包含地の一部を発掘して弥生土器片・打製石斧・石鏃・獣骨片などの出土が記載されている。また、当遺跡については、京都大学の平戸学術調査団の調査報告がある。報告によると、試掘坑からは明確な遺物は出土しなかったが、周辺の畑地から採集された遺物が記載されている。地表下約60㎝の紅色粘土層の上に堆積する黒色有機質土層の包含層が厚さ15㎝走っているのが認められている。遺物には縄文後期の土器・石鏃・石斧、弥生前期・中期の土器片、中世の滑石製石鍋が報告されている。

このほか表面採集されている資料では、萩原博文氏・久原巻二氏による石鋸の報告がある。さらに調査年度は不明であるが、松浦郷土誌には箱式石棺の報告があり、これによると、畑の中央部にあたる地表下52㎝で発見されている。石棺の蓋石には３枚板状石が使用され、棺身は長辺に２枚と１枚、木口部に１枚づつ合計５枚の使用である。その法量は、内法で長辺120㎝、木口部で42㎝と36㎝ある。副葬品および人骨の出土はない。

次に池田遺跡で表採された土器・石器の一部を報告する。

１～３は弥生土器で、１は逆Ｌ字状の平担口縁をもつ甕形土器で、胎土に石英粒を含み、暗褐色を呈する。外面に刷毛目調整痕が認められる。復原口径27㎝を計る。２も逆Ｌ字状口縁をもつ甕形土器で、口縁はやや下がり気味で内側は尖り気味におさめられている。口縁直下に三角突帯

貼り付けが１条めぐる。復原口径28.4㎝を計る。胎土に石英粒を含み、赤褐色を呈する。内外面にナデ調整を施す。３は頸部がややしまり気味に立ち上がり外反する甕形土器の口縁部で、胎土に石英粒を多量に含み、内面黄褐色・外面褐色を呈する。内外面ともナデ調整を施している。４～６は縄文時代の石器で、４は黒色黒曜石を利用した三角鏃で、両脚部と先端部を欠損している。重さ0.8ｇ。５は断面三角形を呈する尖頭器で表裏面ともに荒い調整が施されている。安山岩製で表面に一部自然面を有する。重さは22.5ｇ。６は昭和33年表採された資料で、安山岩製打製石斧である。剝離面は磨滅が著しく、表裏面に自然面を有する。重さ230ｇ。７～10は中世期の遺物で、７は玉縁口縁を呈する白磁碗で、体部上位に１条の隆線がめぐっている。釉は灰白色の釉が全体に薄くかかり、胎土に黒い粒を含んでいる。８も白磁碗の高台部で、比較的薄く削り出しもわずかである。内面体部に浅い沈線がめぐっている。釉は濁白色で、胎土は灰白色である。７・８とも森田勉・横田賢次郎氏分類のⅣ－１・ａ類にあたる。９は同安窯系青磁皿で、内面にヘラによる片彫りと櫛状工具による文様を描き、外面底部の釉をカキ取っている。釉は緑灰色で、胎土は明灰色を呈する。底径5.6㎝。前記分類Ⅰ－２・ｂ類にあたる。10は滑石製石鍋片で、鍔を有するものと思われ、口縁直上を平担に仕上げ、内面を丁寧に磨き出している。外面には削り痕が認められる。このほか中世期の表採資料には白磁碗では内面に櫛目文を有するⅤ－４・ｂ類、体部だけであるがⅤ類もある。皿では口縁端部の釉を削りとってある「口禿」のⅨ類の資料がある。壺も１点採集されている。青磁では龍泉窯系青磁碗の内外面ともに無文のⅠ－１類、内面に草花文を有するⅠ－２類、外面体部に蓮弁文をもつⅠ－５・ｂ類の資料がある。同安窯系青磁碗では、外面に櫛目による文様があり、内面にヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を有するⅠ－１・ｂ類がある。皿では内外面とも無文のⅠ－１・ａ類もある。

(Fig. ８・10)　２．姫神社遺跡

下田遺跡の南方約1.5㎞の小さな入江に面する標高２ｍの姫神社境内が中心地である。西方約400ｍには池田遺跡がある。当遺跡についても京都大学の平戸学術調査団の報告があり、縄文前期の曽畑式土器、中期の阿高式土器、弥生後期の壺、糸切り底を有する土師器が採集されている。昭和41年にはアメリカのウイスコンシン大学アルバート・モアと日

本人学者（内藤・吉崎）による合同調査が行われており、その一部が報告されている。報告書には、縄文前期の轟式土器・曽畑式土器とともに石鏃・石錐・石槍・石斧・石匙・石錘が含まれている。また、萩原・久原氏による縄文後期の土器片とともに石鋸・サイドブレイドが採集されている。

現在では、境内の表土は削り取られており、土器片および石器片が多数露出しており、今後保存しなければならない遺跡である。また、昭和41年に調査された出土品は現在松浦市教育委員会で保管・整理中であるが、ここにその資料の一部を紹介する。

11～16は縄文前期の曽畑式土器で、いずれも胎土に滑石粉末を混入している。11は外面口縁部に棒状の施文具で刺突連点文を３条施し、頸部にも横位の沈線文が３条施されており、内面にも刺突連点文が１条施されている。若干外反する器形を有し、全体に丁寧なナデが行われている。器壁は６㎜前後あり、刺突の深さは２㎜である。胎土・焼成は良好。内外面とも褐色を呈している。12は外面口縁部に横位の沈線文が８条と縦位の短沈線文３条の組み合わせで、内面に横位の短沈線文が３条施されている。若干外反する口縁部で、胎土・焼成は良好。内外面とも暗褐色を呈している。13は口縁部に棒状の施文具で横位の沈線文を６条施した後にその上に斜位２条の沈線が施されている。口唇部には刺突文を、内面には２条の短沈線文を有する。内面に丁寧なナデ調整が行われている。口縁部は外反しており、器壁は７㎜前後である。内外面とも暗褐色を呈する。14も13と同じ方法で構成されており、内面に３条の短沈線文が施されている。外面は褐色で内面は暗褐色を呈する。15・16は胴部の資料で、15は斜位の沈線文を施した後に空間を埋めるように縦位の沈線文を施している。内外面とも褐色を呈する。16は外面に四角の組み合わせで雷文状の文様が施されている。外面は暗褐色で、内面は茶褐色を呈する。17～21は石器で、17は黒色黒曜石製の抉りの浅い石鏃。重さ0.8ｇ。18は側縁が鋸歯状になった剥片鏃で、黒色黒曜石製。重さ0.5ｇ。19は表裏面ともに入念に研磨の痕が認められ、使用によると思われる割れが認められる。硬質であるが石材は不明。重さ80.4ｇ。20は安山岩製の石鉞で、先端部を欠損している。厚い剥片を素材として両側縁に荒い調整が施されている。重さ46.2ｇ。21は安山岩製のつまみ状の突起をもつ横型の石匙で、端部を欠損している。一部自然面を有し、両面からの調整によって直線的な刃部を作り出している。重さ27.7ｇ。

(Fig. 9)　　3．大堂遺跡

下田遺跡の北側約600ｍの標高約40ｍの丘陵地に位置する。付近一帯の畑地に広範囲に遺物が採集される。南側には千人塚墳墓群が所在する。22は昭和46年採集された資料で円錐型細石核である。円礫の一端に打撃を加えて打面を形成し、その打面からの加撃によって、両側面の自然面を除去し、細石刃剝離痕が６条みられる。裏面には自然面を残す。打面調整は行われていなく、打面とのなす角度はほぼ90°である。黒色黒曜石製。重さ16.1ｇ。23は舟底型細石核で、円礫に打撃を加え平担な打面部を作出している。細石刃剝離痕は正・側面まで７条みられ、打面は一方向に傾斜している。黒色黒曜石製。重さ11.5ｇ。24は細石刃の先端部で、使用を伺わせる刃こぼれ様のものが認められる。漆黒色黒曜石製。重さ0.2ｇ。

(Fig. 9)　　4．戸ノ本崎遺跡

下田遺跡の南西約1.8㎞の標高約12ｍの丘陵地に位置する。北側約30ｍには佐世保崎遺跡があり、牟田の水田地帯を挟んで対岸にある。25は表採資料で、結晶片岩製磨製石斧である。断面は楕円形を呈し、刃部には使用痕が観察できる。石材が軟質なためか全体に磨耗が著しい。重さ460.5ｇ。

(Fig. 9)　　5．大石遺跡

下田遺跡の北西約700ｍの丘陵地に位置する。星鹿小学校後背地から神田溜池にかけての畑地・水田地帯に広がっている。下川達彌氏によりナイフ形石器・角錐状石器・両面加工石器・石核が報告されている。その他の採集品では26のナイフ形石器がある。26は比較的厚い剝片を利用したナイフ形石器である。ブランティング加工は側縁のみで、大きな形で施されている。黒色黒曜石製。重さ2.1ｇ。

(Fig. 9)　　6．佐世保崎遺跡

下田遺跡の南西約1.6㎞の星鹿半島西側海岸近くに位置し、標高約５～10ｍのゆるやかな斜面にある。南側には水田地帯が広がっている。昭和57年牟田地区内の圃場整備事業に先がけ川道寛氏による発掘調査が行われている。遺跡は黒曜石の原産地として知られていたが、遺物包含層はすでに削平されており、攪乱層からナイフ形石器・台形石器が出土している。また、黒曜石原石も多数出土しているが、採集地点での石器加工は行われていなかったようである。ここでは表採資料を紹介する。27は百花台タイプの台形石器で、片側縁に裏面からのブランティング加工

を施し、他側縁は折り取っただけのものである。刃部を欠損している。漆黒色黒曜石製で重さ1.4ｇ。28は黒色黒曜石製の石鏃で、基部の抉りが深い。全体的に二次加工が丁寧で、側縁部においては極めて細かく施してある。先端部・脚部を一部欠損している。重さ1.1ｇ。

７．牟田遺跡

下田遺跡の南西約１㎞の牟田の水田地帯に接近して標高約10ｍの丘陵地に位置する。遺跡は松浦高校の踏査によって旧石器資料が発見されており、Ａ～Ｄ地点の名称で呼ばれている。下川達彌・芝本一志氏による報告があり、Ｂ地点よりの資料に細石核・細石刃が紹介されている。また、1984年の下川氏による報告には、Ｂ地点よりナイフ形石器・石核。Ｃ地点よりナイフ形石器・石核・掻器・剝片。Ｄ地点よりナイフ形石器掻器・剝片が紹介されている。1975年萩原・久原氏による石鋸の資料も紹介してある。

(Fig. 6)　ここでは現在まで報告が行われている姫神社遺跡の遺物を上げてみた。１～５は『松浦考古第２号』報告分で１～５は黒曜石製石鏃で、１は剝片鏃で、２は大形、３は円味を帯びた五角形状をし、４は鋭利は尖頭状を呈する石鏃である。５は全面に調整剝離が施されている石鋸の資料である。６～９は『古代文化27巻４号』報告分のサイドブレイドである。

(Fig. 10)　これは京都大学の『平戸の先史文化』の中の松浦市関係報告である。１～26は池田遺跡（池田下遺跡で報告）の遺物。27～31は姫神社遺跡出土遺物である。個々の説明は省き図示だけにした。

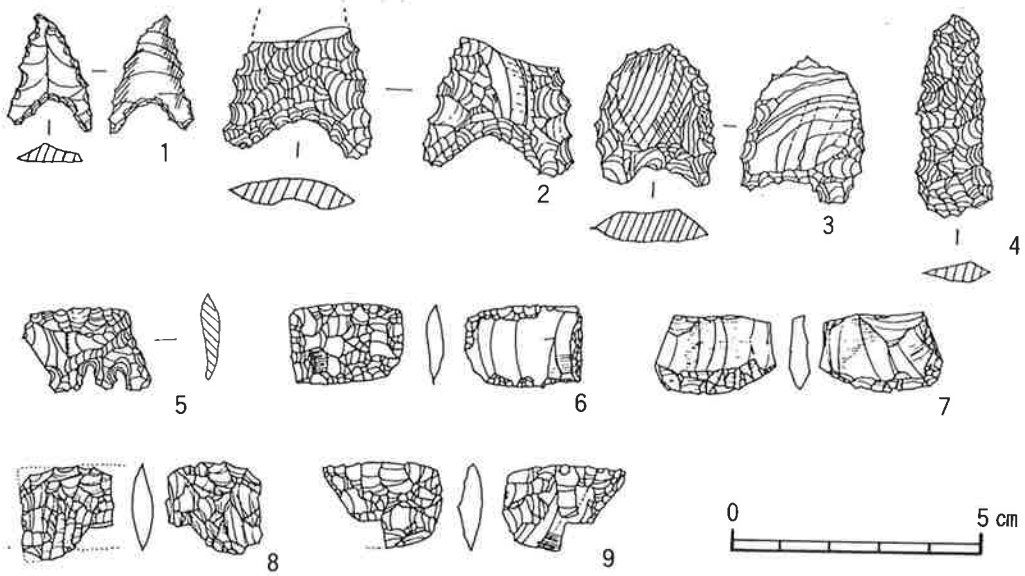


Fig. 6　周辺の遺跡（２／３）

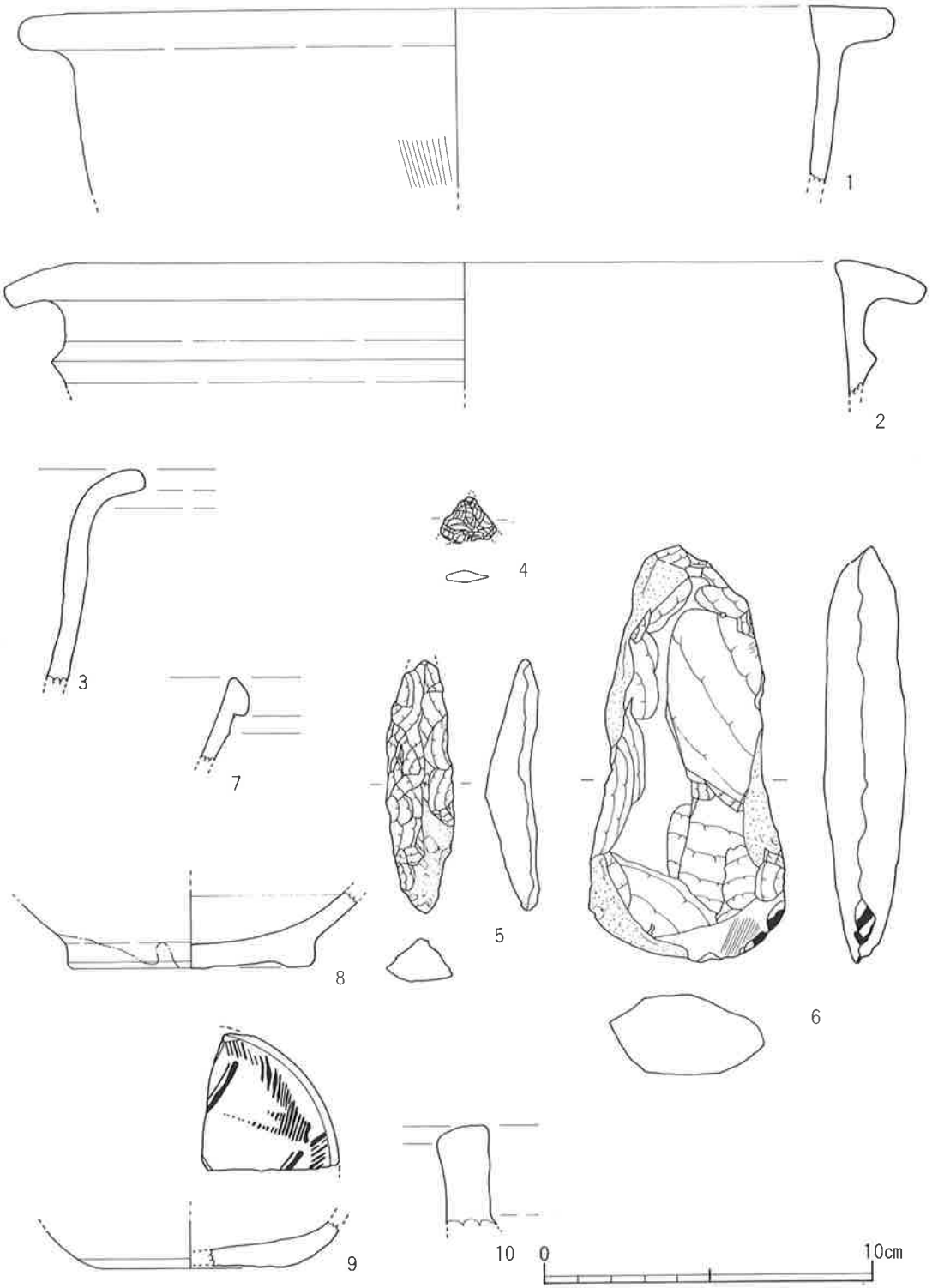


Fig. 7　周辺の遺跡（1／2）

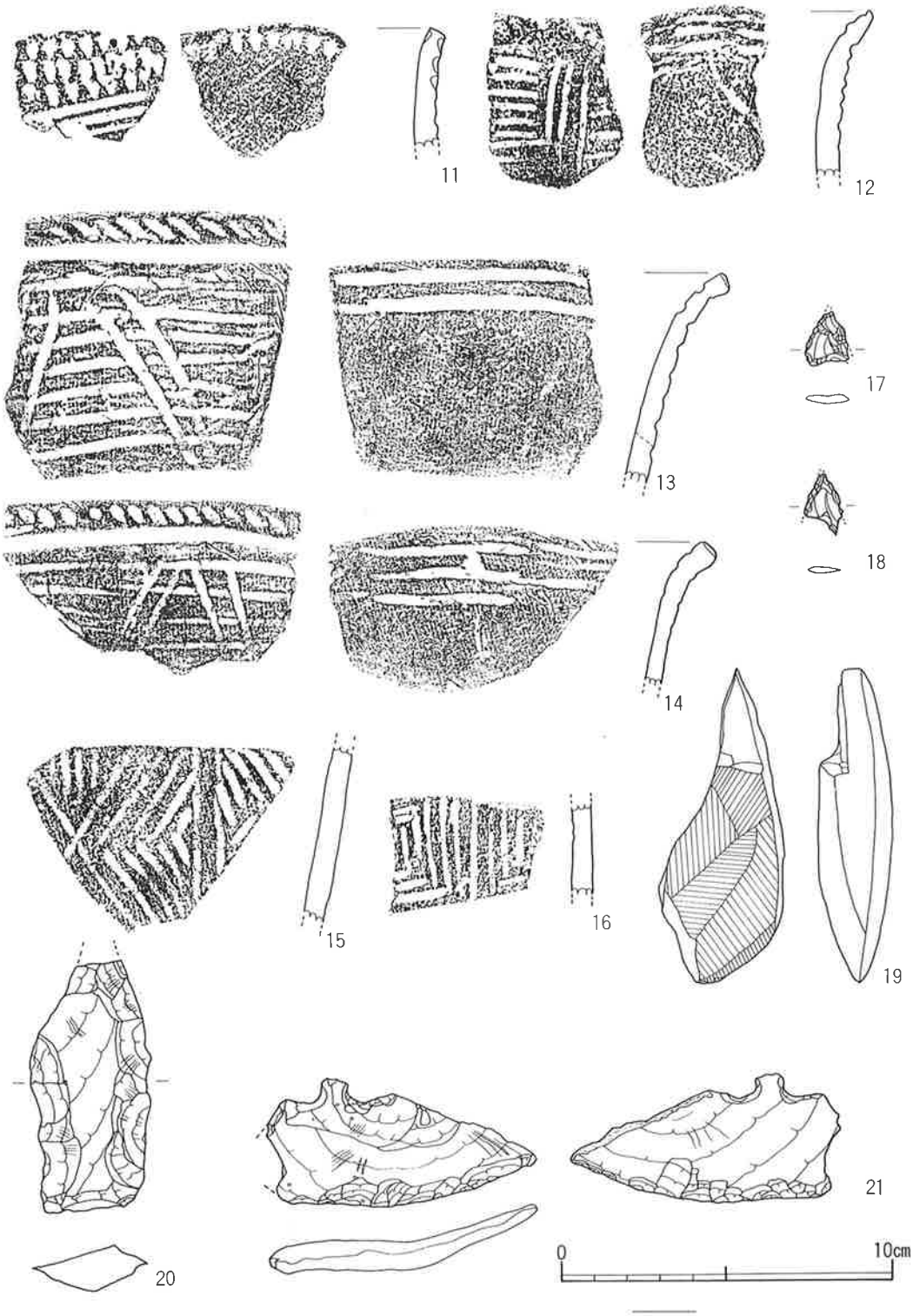


Fig. 8　周辺の遺跡（1／2）

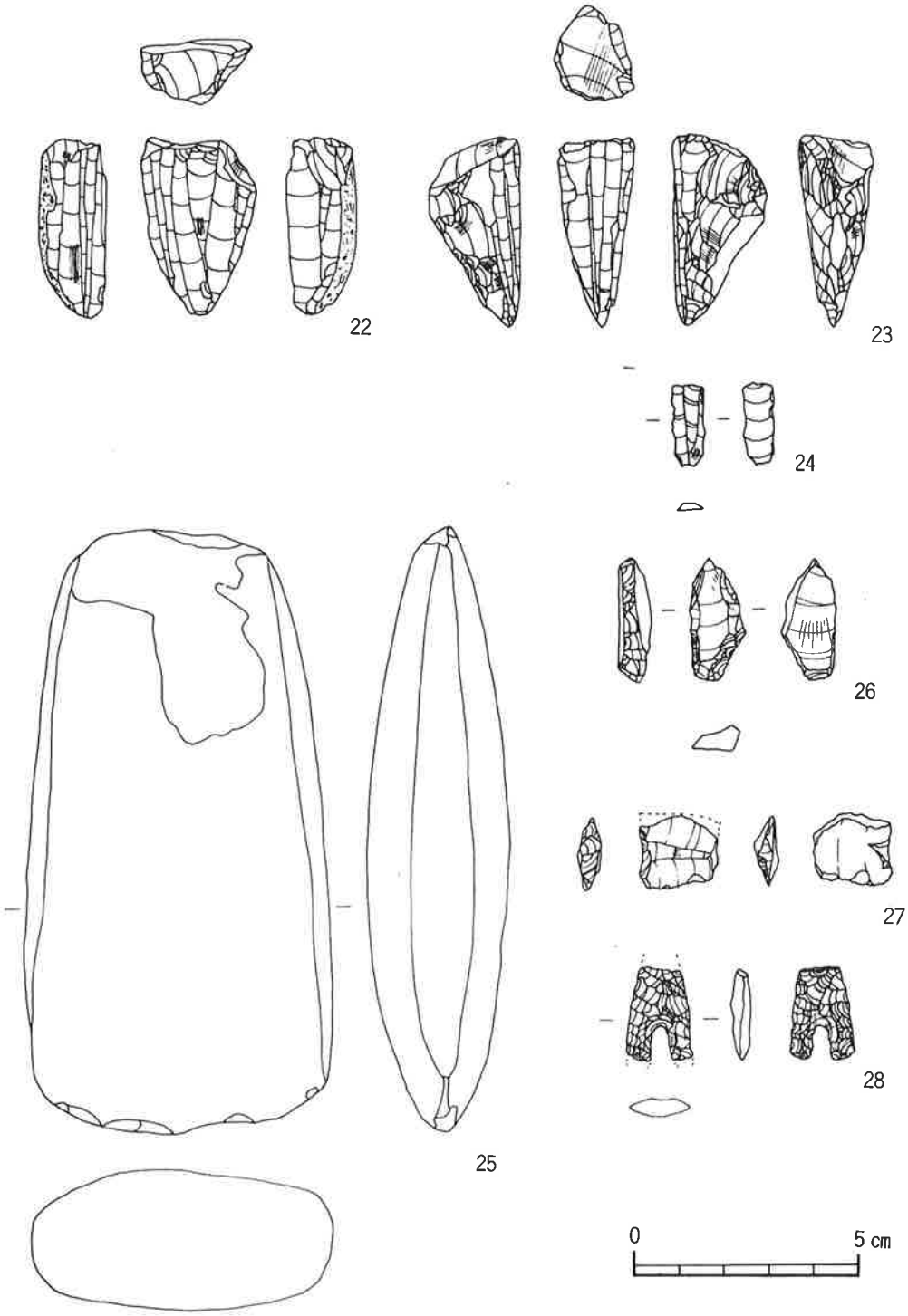


Fig. 9　周辺の遺跡（2／3）

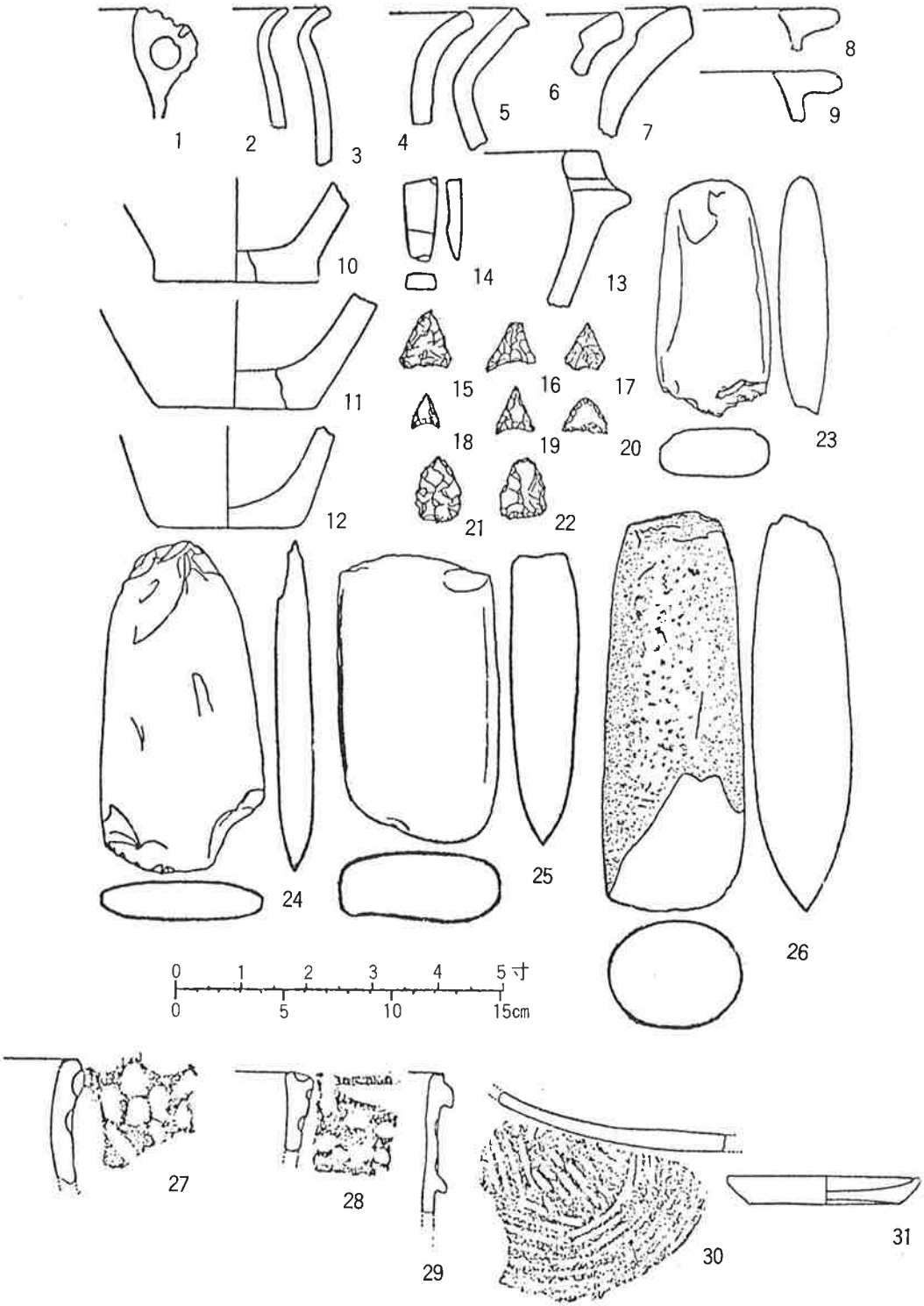


Fig. 10　周辺の遺跡（1／3）

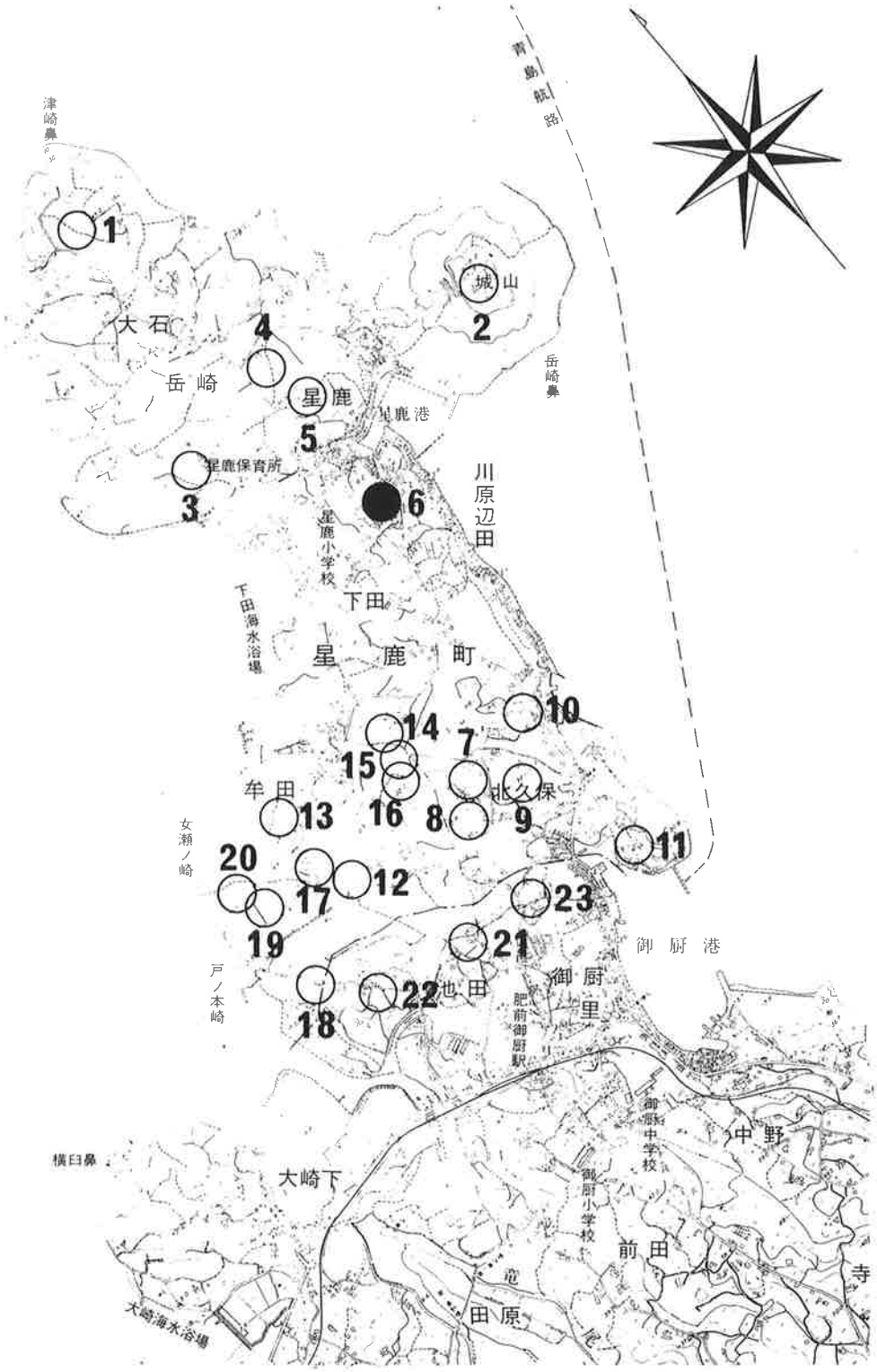


Fig. 11　星鹿半島遺跡地図（1／25,000）

Tab. 1　星鹿半島遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土遺物など	文献	備考
1	津崎	星鹿町岳崎免 津崎	石鏃、剥片	5	中田採集
2	刈萱城址	〃 〃 岳崎		15. 16	城の輪郭のみ
3	大石	〃 〃 追出、血田辻	ナイフ形石器、角錐状石器、石核	6.15.本書	中田採集
4	大堂	〃 〃 堤田	細石核、石核、石鏃	4．本書	中田、石橋採集
5	千人塚墳墓群	〃 〃 丸久保		15. 17	墳墓が6ヶ所
6	下田	〃 下田免 山口、山川	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、掻器	本書	
7	北久保A	〃 北久保免 勢ノ巣	石鏃、弥生土器	15. 17	
8	〃 B	〃 〃 北久保	剥片	17	消滅
9	〃 C	〃 〃 浦頭	剥片	15. 17	
10	〃 D	〃 〃 〃	石鏃剥片	15. 17	
11	姫神社	〃 〃 宮崎	縄文土器、石斧、石鏃、石鋸須恵器	2.3.8.10 本書	昭和41年調査
12	北久保経塚	〃 〃 竿		5	2基
13	牟田A	〃 牟田免 中尾	ナイフ形石器、黒曜石原石	15	
14	〃 B	〃 北久保免 藤園	ナイフ形石器、細石核、細石刃、石核	6	消滅？
15	〃 C	〃 〃 〃	ナイフ形石器、掻器、剥片	6	〃
16	〃 D	〃 〃 〃	ナイフ形石器、掻器、剥片	6	〃
17	牟田池上	〃 牟田免 池上	石核、石鏃、黒曜石原石	5	昭和58年調査
18	戸ノ本崎	〃 〃 〃	ナイフ形石器、石斧、石鏃	4. 本書	
19	佐世保崎	〃 〃 佐世保崎	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、黒曜石原石	4. 本書	昭和57年調査
20	女瀬ノ崎	〃 〃 〃	ナイフ形石器、台形石器 黒曜石原石	15	
21	長蔵坊	御厨町池田免 長蔵坊	ナイフ形石器、ラウンドスクレパー、黒曜石原石	6．15	
22	中ノ崎	〃 〃 中ノ崎	ナイフ形石器、黒曜石原石	15	
23	池田	〃 〃 田崎 〃 里免 下長峯	縄文土器、弥生土器、石斧、石鏃 白磁、青磁、滑石製石鍋、獣骨	1.2.3.6 9.15	昭和25年調査

〈参考文献〉

1．前田毅「肥前御厨貝塚発見報告」『人類学雑誌40－10』　1925
2．樋口隆康・釣田正哉「平戸の先史文化」『平戸学術調査報告書』　1951
3．萩原博文・久原巻二「九州西北部の石鋸、サイドブレイドについて」『古代文化27－4』　1975
4．川道寛「松浦市圃場整備事業にかかる埋蔵文化財確認調査の結果について」　1982
5．中田敦之『牟田池上遺跡』　松浦市教育委員会　1984
6．下川達彌「長崎県松浦市域における旧石器時代遺跡」『長崎県北松浦地方の文化』長崎県立美術博物館　1984
7．長崎県立松浦高等学校郷土社会部「松浦市古代遺跡地名略表と遺物略表」『松浦考古特別号1』　1966
8．長崎県立松浦高等学校郷土社会部「姫神社遺跡発掘調査から」『松浦考古第2号』1966
9．松浦市社会科教育研究会「社会科資料松浦郷土誌」松浦市社会科研究部会　1963
10．ALBERTMOHR AND MASAKAZU YOSHIZAKI　「Cultural Sequence in Western Kyushu」『Asian Perspectives』16巻2号　1973
11．森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　1978
12．中村愿「曽畑式土器」『縄文文化の研究』3　雄山閣　1982
13．松藤和人ほか『伊木力遺跡』　多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室編　1986
14．安楽勉・中田敦之ほか『楼楷田遺跡』　長崎県文化財調査報告書第76集　長崎県教育委員会・松浦市教育委員会　1985
15．松浦市遺跡地図　長崎県教育委員会　1982
16．外山幹夫・高島忠平『日本城郭大系17　長崎・佐賀』　新人物往来社　1980
17．文化庁編『全国遺跡地図42　長崎県』　1976

〈参考文献〉（Ⅲ．松浦市域の地形的環境）

1．長崎県　土地分類基本調査「平戸」「佐世保」　1974
2．佐賀県　土地分類基本調査「呼子・唐津」　1974
3．佐賀県　土地分類基本調査「伊万里」　1975
4．松浦市史編纂委員会　『松浦市史』　1975
5．岩橋徹　北松地区およびその周辺にみられる八ノ久保砂礫層（新称）について－佐世保炭田の研究（その2）　九大理学部研究報告（地質）2－（2）

V 発 掘 調 査

1. 調査の概要
(Fig. 12)

発掘調査は、昭和61年９月４日から行い、まず調査機材の運搬を行ってから、畑地の草刈り作業から開始した。代採作業が終了した地点の最高部において磁北に沿って基準線を設け、これと平行する直線で調査区を設定した。調査区は幅２ｍを基本単位としてトレンチ方式を主として作業を進め、調査状況に応じて周囲を拡張した。調査区の各名称は設定した順番にNo１～No19までを付して呼ぶことにした。

調査は、畑地の最高部北端から始め、遺跡の性格・遺構・遺物包含層の有無の確認、遺跡の範囲および種類、時代の確認することを第１と考えて行った。調査区は順次低地の畑地へと展開してゆき、トレンチ数19ヶ所、面積187㎡で、10月3日に終了した。

この調査で検出した遺構には、No４トレンチにおいて石組井戸状遺構１基、石組溝状遺構１基、竪穴１基が確認された。

2. 土 層
(Fig. 13)

遺跡内では19ヶ所の調査区を設定し発掘作業を進めた。その土層は、西側から南側にかけてゆるやかに傾斜している。標高13ｍから最高部の17ｍまでの畑地においては、包含層の確認はできなかった。No１・３・５・６・７・８・９・10トレンチにおいては、耕作土下に基盤の赤褐色粘質土層が堆積しており遺構・遺物は検出できなかった。しかし、この地区より多数の表採資料があり、かつては良好な包含層があったことが伺い知れる。

遺跡西側のNo16トレンチは、かつては溜池であったといわれた地点で、調査を進める段階ですぐ湧水が進入してきて１ｍ程掘り下げて中止した。土層は流れ込んで堆積した状況であった。

遺跡北西側のNo18トレンチにおいては、砂岩の基盤直上まで後世の攪乱によって乱されており、正常な土層堆積を呈していなかった。

遺跡南側のNo13トレンチにおいても一部東側に後世の溝状遺構がほぼ南北に走っており、土層は攪乱を受けており、正常な堆積を呈していなかった。しかし、攪乱層より台形石器・青磁等が出土している。同じく遺跡の南側において一部良好な包含層がNo12・15トレンチを中心として確認できた。

No12トレンチでは表土層の灰褐色粘質土層の下に厚さ10～20㎝程の第２層の褐色粘質土層がある。第３層はやや黄色味を帯びた暗褐色粘質土

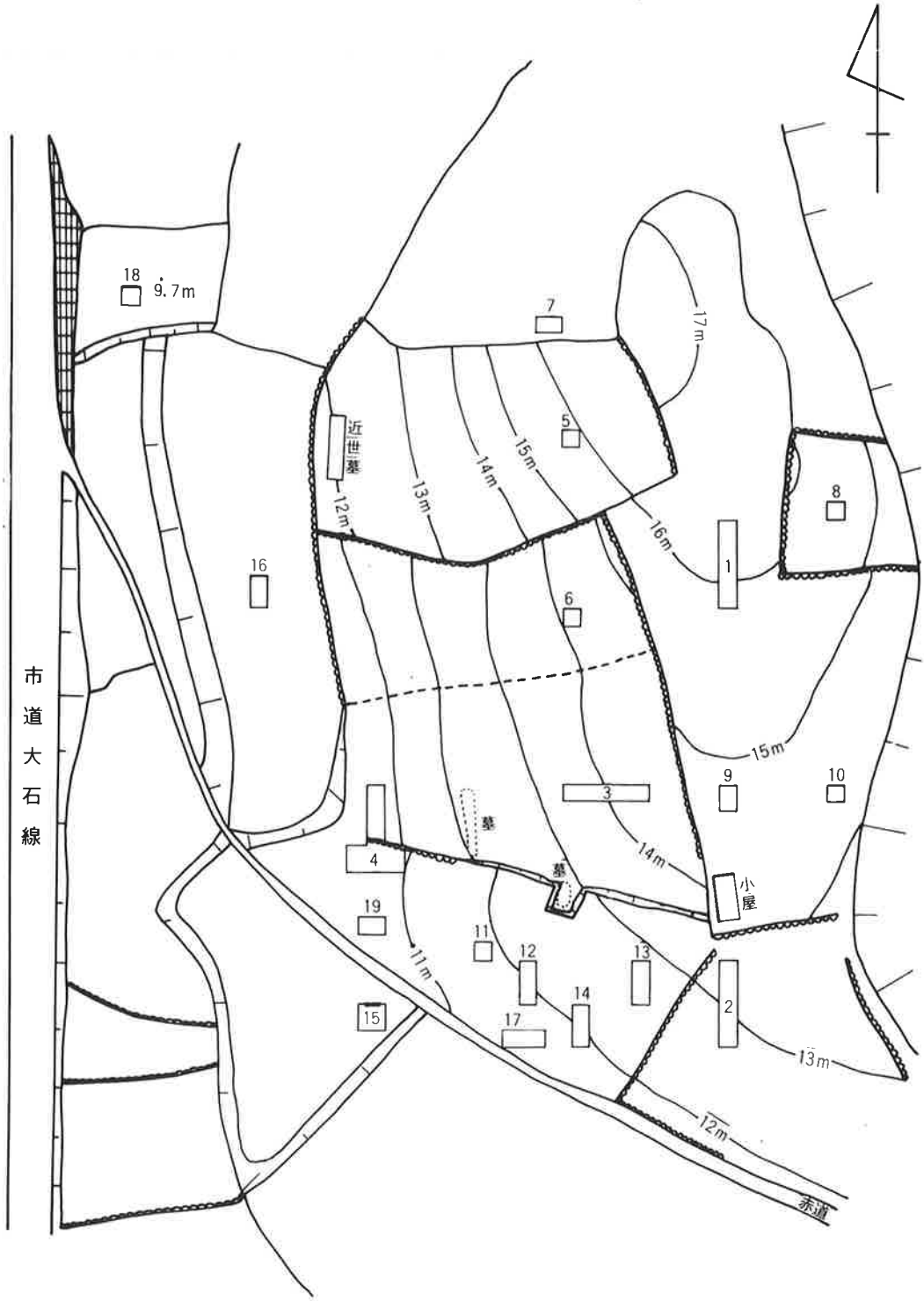
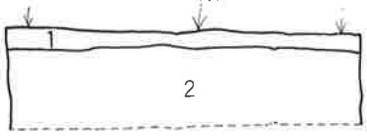


Fig. 12　調査設定図（1／750）

No 5 東 壁

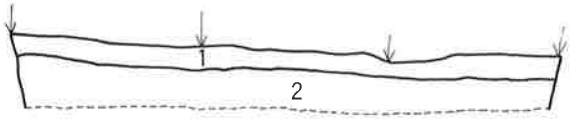


14.4m

1 耕作土

2 赤褐色粘質土層

No 9 東 壁

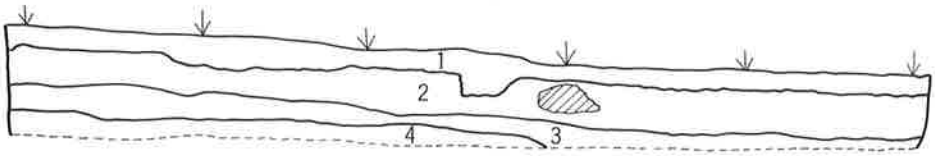


14.8m

1 耕作土

2 赤褐色粘質土層

No 14 東 壁

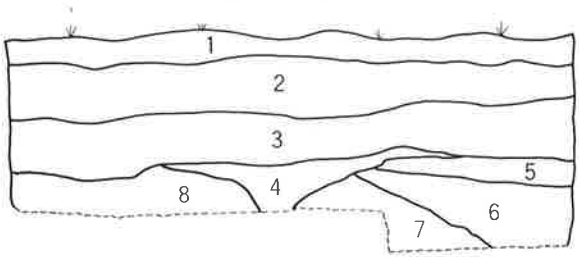


12m

1 耕作土　　2 褐色粘質土層

3 褐黄色粘質土層　　4 黄褐色粘質土層（部分的に砂岩礫を含む）

No 15 北 壁



11m

1 表 土

2 褐色粘質土層

3 明褐色粘質土層

4 黄褐色粘質土層

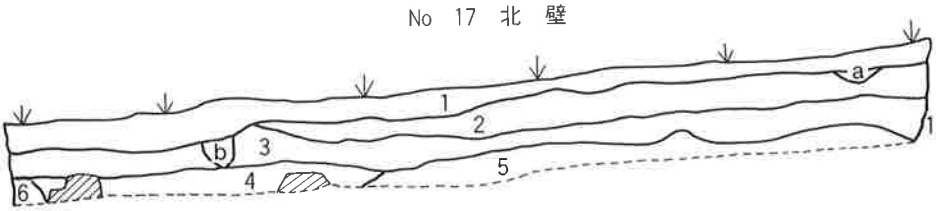
5 黄褐色混砂礫層

6 灰青色粘土層

7 濁黄色粘質土層

8 褐色砂礫層

No 17 北 壁



12.26m

1 耕作土　　2 褐色粘質土層　　3 褐黄色粘質土層

4 黄褐色粘質土層　　5 黄褐色混砂礫層　　6 灰青色粘土層

a・b 耕作物の落ち込み

Fig. 13 土 層 図（1／40）

層で厚さ20㎝程である。遺物はこの第２層と第３層より出土している。第４層は風化礫を含んだ褐黄色粘質土層である。

3. 遺構

(Fig. 14・15)

遺跡内における遺構では、北側の標高12ｍの畑地において、寛保２年（1742）と延享３年（1746）の近世墓が所在し、また、草刈り作業中において、南側の標高12～13ｍの雑種地において、墓碑がない墓群（６基？～10基？）と、宝篋印塔をもつ墓址が発見された。

トレンチ内においては、№４トレンチの南側において、石組の井戸状遺構１基、石組溝状遺構１基、竪穴１基が確認された。

(Fig. 14)

（１）井戸状遺構

竪穴上面は、やや円形状を呈し、216×232㎝を計る。掘り込み部分のほとんどは、砂岩の基盤を刳っている。断面は、中程に段をもち、さらに逆台形状にすぼまる。底面はやや平担で、90×95㎝の円形状を呈する。上面から底面までの深さは96㎝を計る。竪穴内には、20～30㎝ほどの平たい玄武岩・砂岩を利用して、中程の平担部に礫を意識的に４段敷いている。竪穴内の覆土は礫内が茶褐色粘質土で、礫より下が黄茶褐色粘質土で、やわらかくしまりがない状態であった。遺物には、黒曜石原石がほとんどで、上面からの流れ込みと思われる。遺構の時期については明確ではないが、溝状遺構とも考えあわせると、近世の建物に伴う貯水のための施設の井戸ではかいかと思われる。

(Fig. 15)

（２）溝状遺構

井戸状遺構の西側に接近してほぼ南北に礫を２条敷いた溝状の遺構である。幅80～90㎝程あり、深さ約10㎝であった。覆土は井戸状遺構上面と同じ茶褐色粘質土であった。遺物には近世の波佐見焼と思われる茶碗が出土している。また、同じ覆土内より緑泥片岩製の硯片１点も出土している。

(Fig. 15)

（３）竪穴遺構

溝状遺構の西側に接近して、深さ約50㎝程度の100×114㎝の楕円形状の竪穴が確認された。性格・時期等については不明であるが芋類の貯蔵穴の可能性もある。

今回の調査では、建物跡の遺構については確認する段階まで至らなかった。

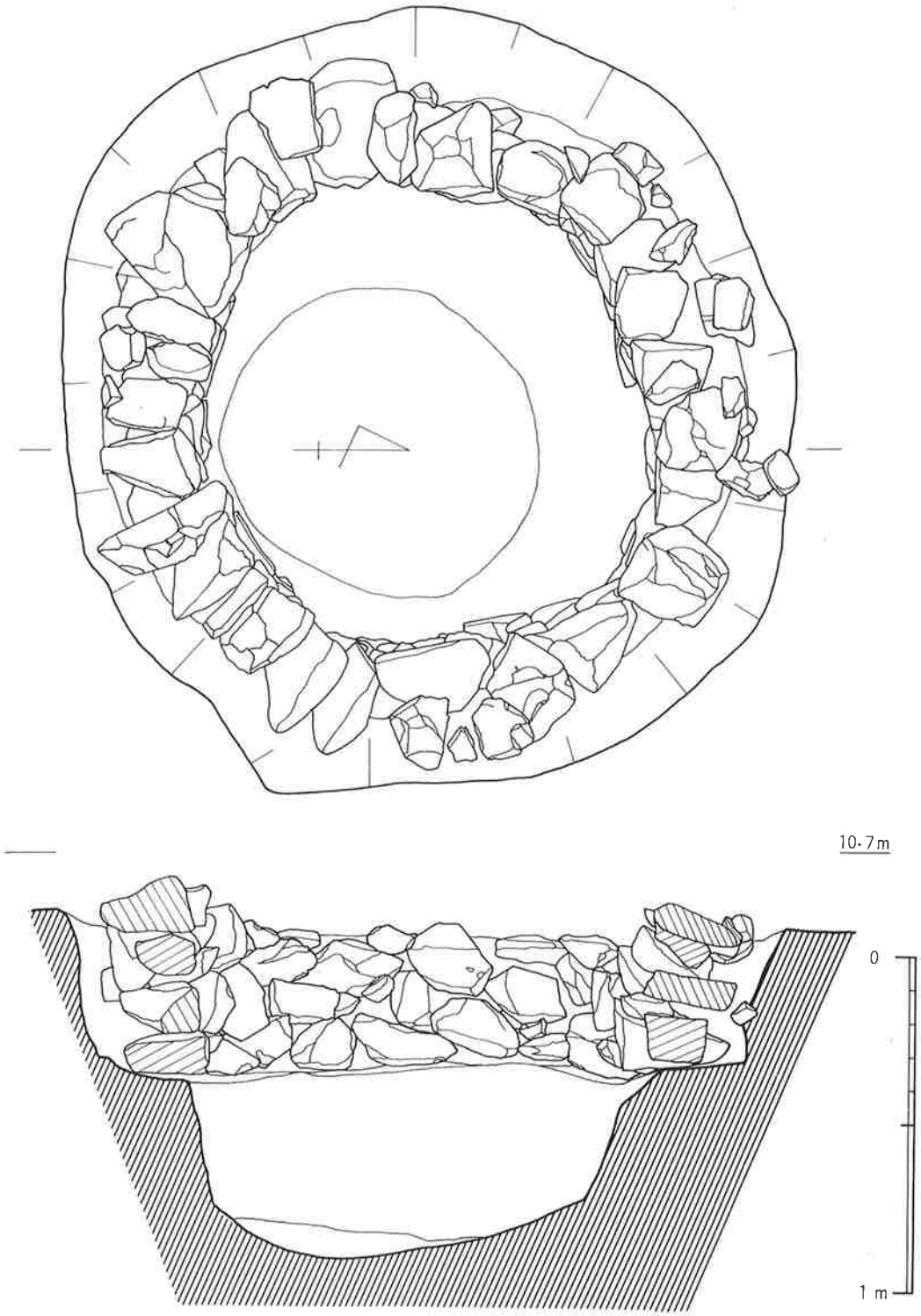


Fig. 14　井戸状遺構実測図（1／20）

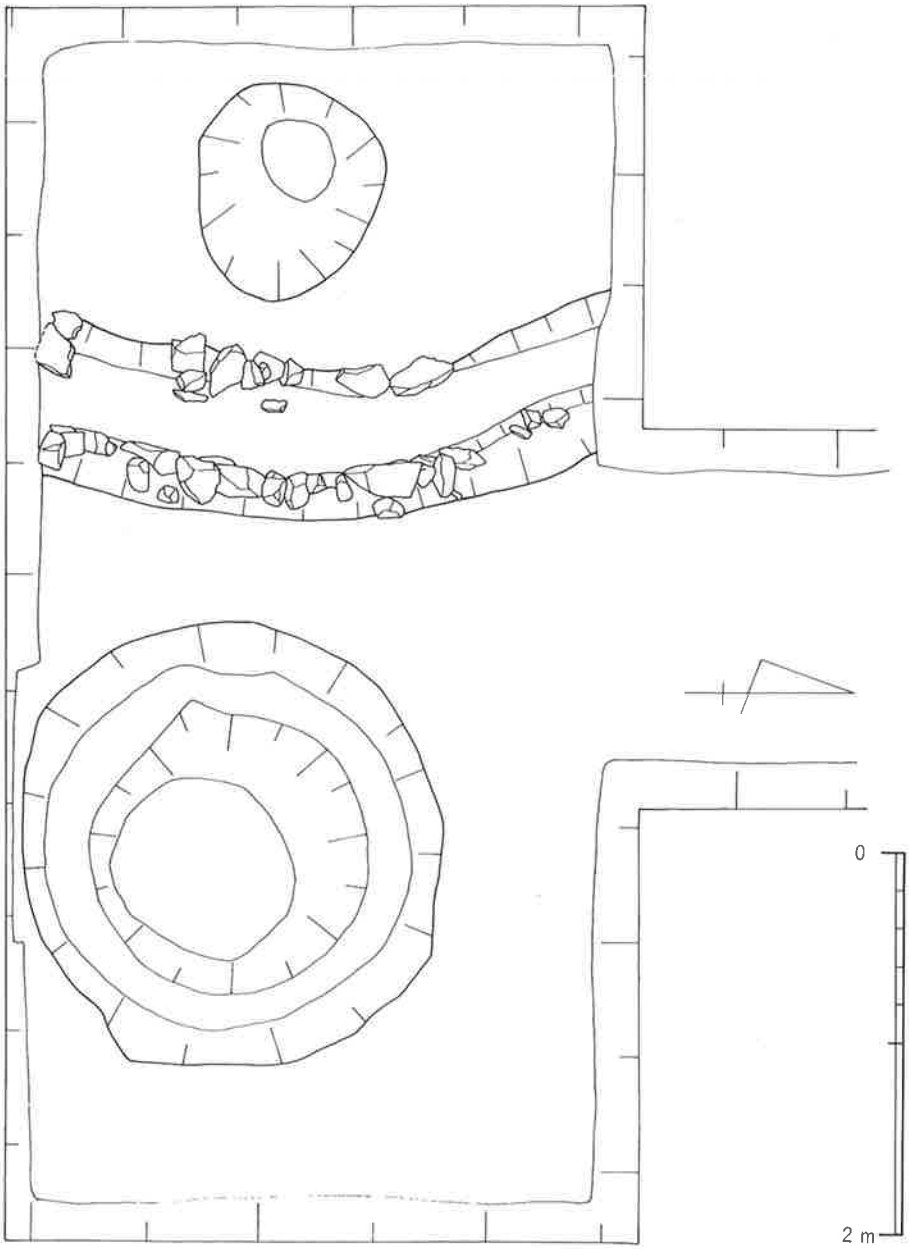


Fig. 15　No 4 トレンチ遺構配置図（1／40）

4．遺物の出土状況（Tab. 2）

遺物は、畑地最高部の標高14～16ｍにおいて広範囲に採集できた。しかし、土層状況でも述べたように畑作によって、かつての包含層は破壊されており表採資料のみである。No12・15トレンチを中心とした遺跡南側では薄いながらも旧石器時代の包含層が確認できた。遺跡内における遺物数は2,123点であった。しかし、出土遺物の大半は表土および攪乱層からの出土で、その中でも黒曜石原石が約75％を示めている。資料的には旧石器時代から近世までが認められている。包含層の中より台形石器・石核等が検出され、表採資料では、ナイフ形石器・石鏃・石鋸・サイドブレイド・白磁・青磁等があげられる。表採資料より考えてみると、かつては良好な旧石器時代から縄文時代にかけての包含層があったことが理解できる。調査区南側においては良好な包含層が残っているため、No12・15・17トレンチを中心とした狭い範囲からその南側の畑地において包含層が残っていると考えられる。しかし、縄文時代の包含層を確認する段階までにはいたらなかった。今後周辺の遺跡をも含めての検討課題としたい。

Tab. 2　出土遺物一覧表

トレンチ	石　器	石　核	黒曜石原石	陶磁器	その他	計
No 2　攪乱層	53	10	7	43	1	114
No 4　表　土	26	4	180	45	2	257
No 6　表　土	16	4	9	27	0	56
No11　表　土	0	0	134	4	0	138
No12　表　土	6	1	58	2	0	67
No13　表　土	0	0	100	0	0	100
No14　表　土	6	3	31	9	0	49
No15　2～5層	5	0	325	0	2	332
No16　2　層	14	3	23	14	0	54
No17　2　層	10	2	9	0	0	21
No19　表　土	2	6	100	8	4	120
No12　2～3層	14	3	39	0	0	56
No13　攪乱層	35	4	23	23	2	87
No14　2～3層	14	1	26	6	0	47
表　採	45	13	526	33	8	625
合　計	246	54	1,590	214	19	2,123

(Fig. 16)　　ここでは、比較的良好な包含層が認められたNo12トレンチにおいてのみを取り上げてみた。遺物には、黒曜石原石が多く、台形石器・彫器・剥片・石核が若干出土している。いずれも第２層の褐色粘質土、第３層の暗褐色粘質土よりの出土であった。出土状況から見ても同地点での石器加工は行われていない。

5．出土遺物

(Fig. 17～19)
(Tab. 3)

No12トレンチにおける出土遺物は、総数56点であった。そのうち黒曜石原石は39点で全体の約70％を示めている。原石は、全長約３㎝から６㎝までのいづれも拳大より小さい円礫で、礫面は海綿状を呈している。星鹿半島一帯で採集できる原石とほとんど同じであり、断口の色調は黒色を呈し、ガラス光沢に富み良質である。

１は斜行する刃部をもち、刃部と基部が平行になる台形石器である。刃部に最大幅を有し、ブランティング加工は裏面から両側縁部に行われている。裏面にも平担剥離を施している。刃部には刃こぼれが顕著に認められる。２はやや小形の台形石器である。刃部に最大幅を有し、ブランティング加工は裏面から両側縁部に行われている。刃部は直線的で基部と平行する。基部裏面にも調整加工を行っており、基部先端部には自然面を有する。３は彫器で、不定形の剥片を折断し、その末端部に彫刻刃面を２条形成している。剥片の側縁部には細部調整加工を行っている。

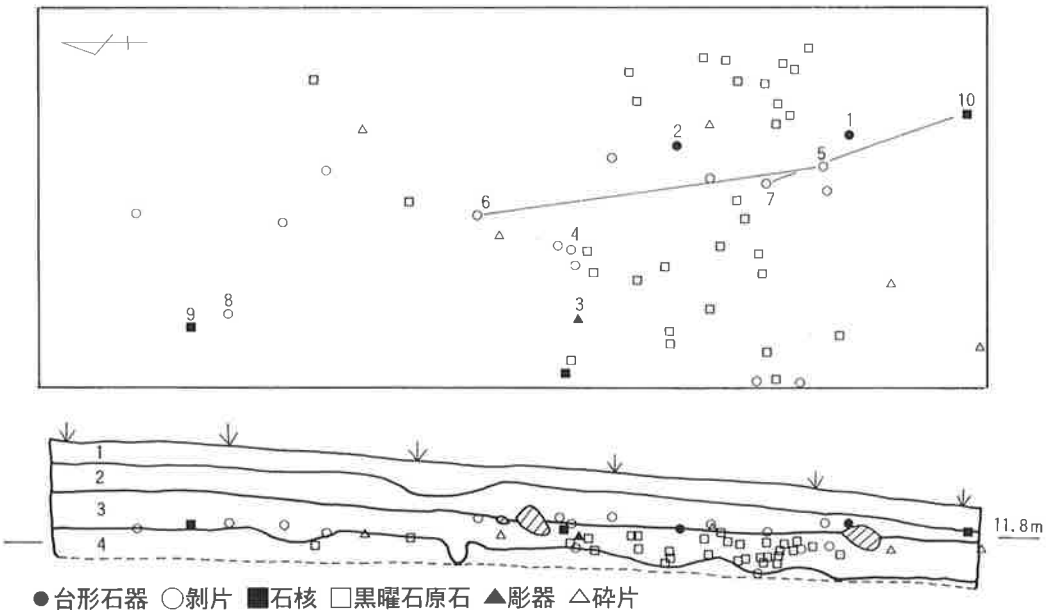


Fig. 16　No12トレンチ平面図・土層図（１／40）

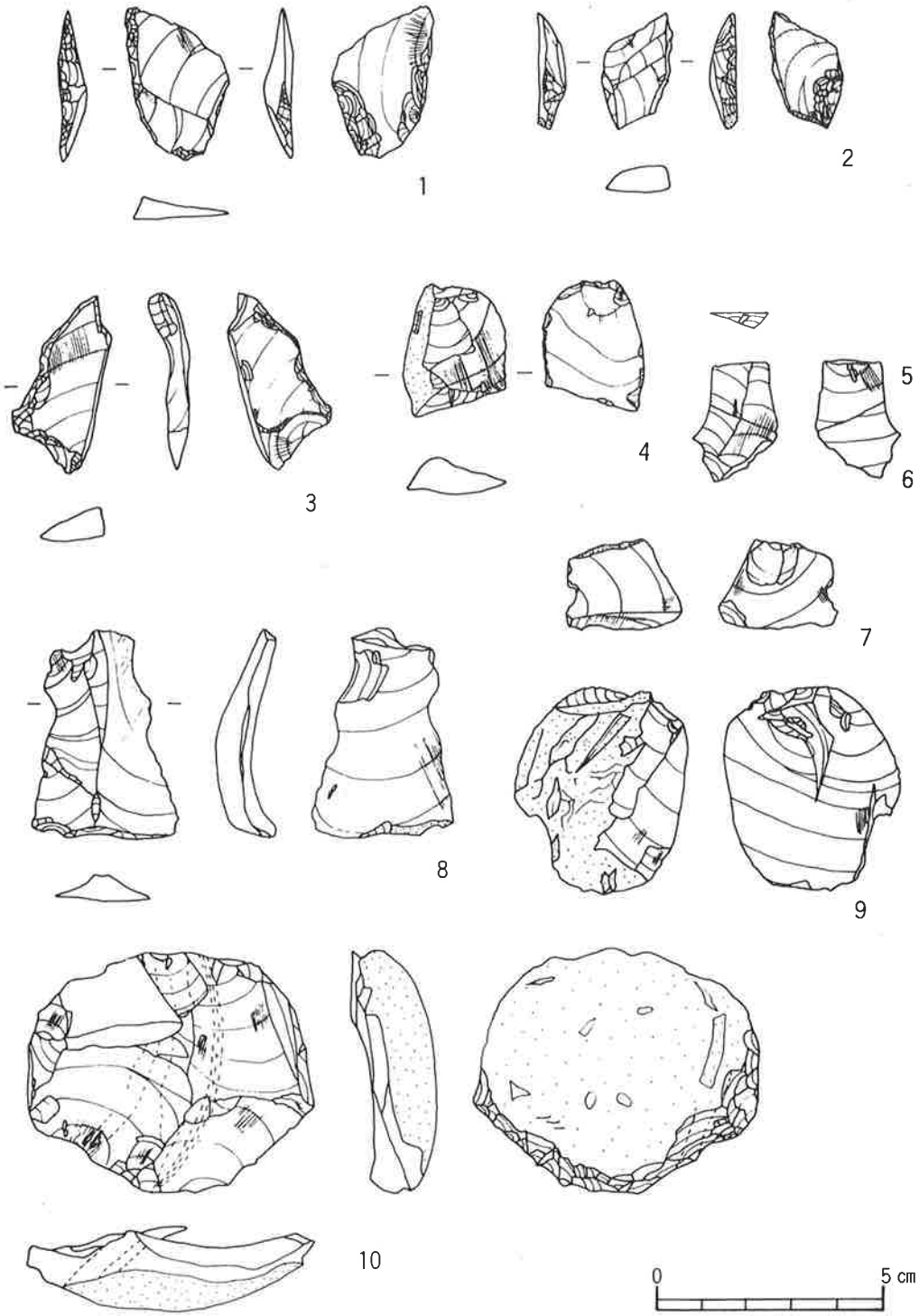


Fig. 17　No12トレンチ出土遺物（2／3）

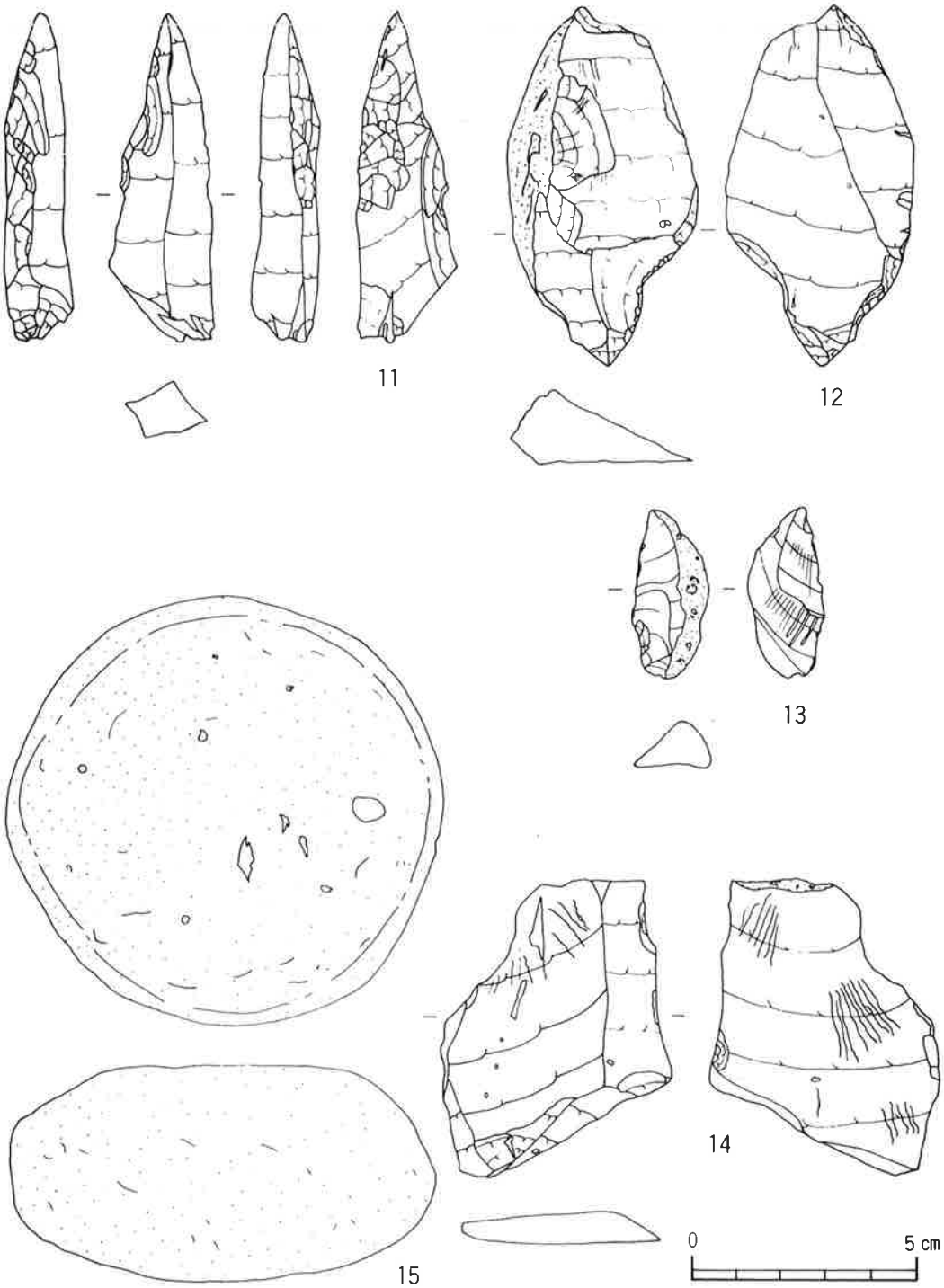


Fig. 18　No15トレンチ出土遺物（2／3）

4は裏面に自然面を有し、縦長剥片の先端部を折断した剥片で、右側縁部に使用痕による刃こぼれが著しい。5・6は剥片の接合資料である。頭部と先端部を折断したもので、表面からの打撃によって中間部で折れている。2点間の接合距離は185cmである。7は礫面を打面とした剥片で、10との接合資料である。接合距離は113cmである。8は縦長剥片で、表面に数条の剥離痕をもっている。ナイフ形石器あるいは台形石器の素材として適当な剥片である。9は拳大よりやや小さな円礫を利用し、自然面を有する剥片を剥ぎ取った後に、石核調整の初段階で剥離し、放棄した石核である。礫の表面には大きな凹凸がみられる。全面パティナに覆われている。10は拳大の円礫の¼程度の石核で、上下に打面をもち、不定形の剥片剥離を行っている。打面と剥離面は鋭角を成しており、7に見られるように薄手の剥片を生産したのであろう。剥離面には縞模様が認められる。裏面は大部分が自然面に覆われているが、下面から側縁に調整加工を施しており、また、剥離面がフラットなため、石核をエンド・スクレイパーとして再利用したのであろう。

(Fig. 18)　No15トレンチにおいてはほとんどが黒曜石の原石で、若干の石器が2

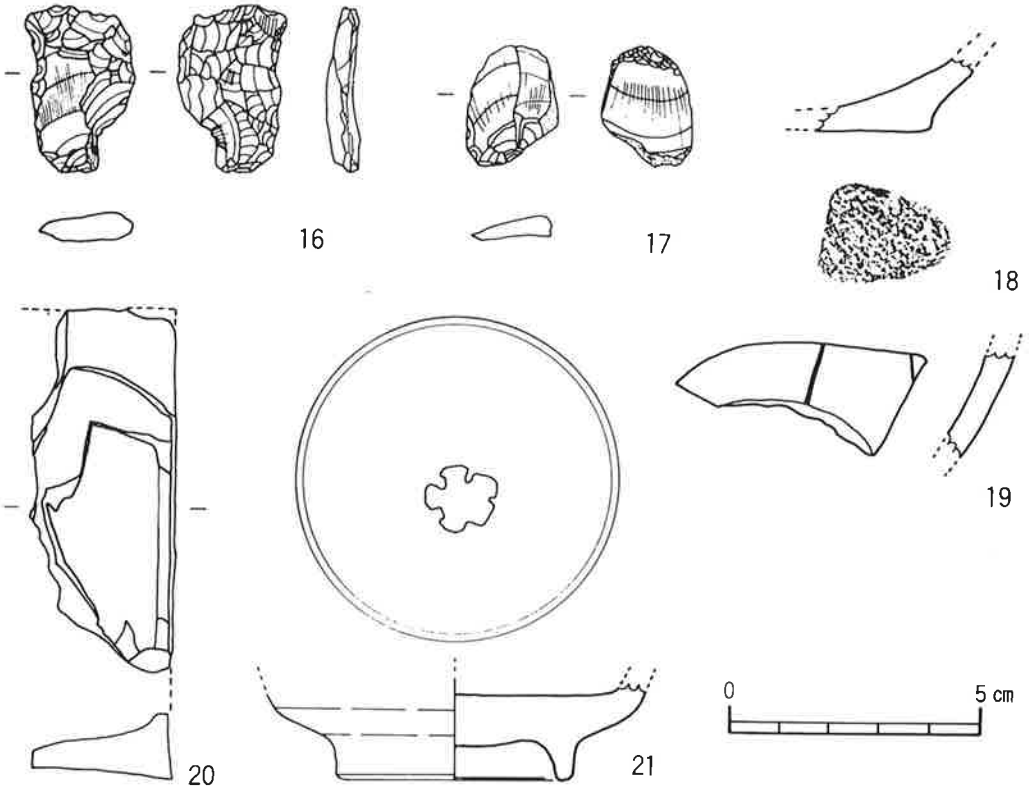


Fig. 19　No13・4トレンチ出土遺物（2／3）

層の褐色粘質土より、原石が第2・3・4・8層より出土している。

11は表面中央に陵をもつ断面三角形の尖頭器である。両側縁から先端部にかけて調整加工が行われている。両側縁部は意識的に直線を成していない。12は縦長剥片を利用したスクレイパーである。表面に一部自然面があり、先端部に抉入状に使用痕と調整加工が認められる。13は使用痕のある剥片で表面左側縁部に小さい刃こぼれが顕著にみられる。14は剥片で打面部は自然面で平坦である。15は磨石で両面に磨痕が顕著である。

(Fig. 19)　No13トレンチの攪乱層より旧石器時代から近世までの遺物87点がある。

16は台形石器で、平坦剥離が表裏に向って行われており、表面には縞模様が認められる。17は小形の剥片を用い、バルブを除去するために細部調整加工を行っている剥片であるが、台形石器の範疇に含まれる可能性がある。右側縁部に自然面を有する。18は土師器皿の底部で、磨滅が著しいが糸切り底であろう。19は龍泉窯系青磁碗の体部で、ヘラ先による細線蓮弁をもつ。釉は淡緑色で胎土は濁白色を呈している。16世紀の所産であろうか。このほか、細片のため図示できなかったが、龍泉窯系青磁片も出土している。20・21はNo4トレンチの溝状遺構の茶褐色粘質の覆土内よりの遺物で20は緑泥片岩の硯片である。陸部が凹み、裏面は平坦な面をもち磨滅している。21は内面見込みに五弁花のコンニャク判が施文してある青磁碗である。釉は淡青色で胎土は灰白色である。内外面高台の釉を削り取り、高台見込みには目跡がある。高台径4.4cmである。

Tab. 3　出土遺物計測表

図版番号	器種	材質	大きさ(cm) 全長	大きさ(cm) 全幅	重さ(g)
Fig17−1	台形石器	黒色黒曜石	3.34	2.78	2.9
2	〃	〃	2.55	1.52	2.2
3	彫器	〃	3.85	2.21	4.2
4	使用痕のある剥片	〃	2.92	2.25	5.2
5	剥片	〃			
6	〃	〃			
7	〃	〃	1.95	2.6	1.5
8	〃	〃	4.58	3.22	8.9
9	石核	〃	4.5	3.85	29.1
10	〃	〃	5.31	6.23	55.8
Fig18−11	尖頭器	安山岩	7.36	2.28	20.4
12	スクレイパー	〃	7.97	4.17	50.7
13	使用痕のある剥片	黒色黒曜石	3.8	1.7	5.4
14	剥片	安山岩	6.16	5.08	27.7
15	磨石	砂岩	9.53	9.7	704.2
Fig17−16	台形石器	黒色黒曜石	3.3	2.2	4.6
17	台形石器?	〃	2.4	1.8	2.3

Ⅵ　下田遺跡表採資料について

(Fig. 20～22)　表採された資料はNo１トレンチを中心とするイモ畑よりほとんどが採集されている。その点数は625点でその中には石器や剥片とともに多数の黒曜石原石もあるが主として縄文時代の遺物が多い。それら採集された資料を紹介する。

旧石器時代の資料では、４点のナイフ形石器がある。

１は均整のとれた細身のナイフ形石器で、先端部を欠損している。ブランティング加工は表面の上位が正面から下位が裏面より行われており、基部調整は入念さを持って施されている。黒色黒曜石製。２も先端部を欠損しており、ブランティング加工は右側縁部と左側縁部下位に施されている。基部調整を施こし整形している。黒色黒曜石製。３は断面三角形の剥片を素材とし、ブランティング加工は両側縁部におよんでいる。No14トレンチ表土出土。黒色黒曜石製。４は先端部のみの資料で左側縁部にブランティング加工が施されている。１・３のナイフ形石器は柿崎遺跡第２層（暗褐色硬質土）中の石器群の基部裏面調整を施しているナイフ形石器に類似している。柿崎遺跡はナイフ形石器の器種の多様性、台形石器の減少傾向が指摘されているが、ナイフ形石器と台形石器の盛行期として捉えられている。下田遺跡も同様にフェイズⅡ後期の中山期に位置ずけられるであろう。

縄文時代の資料では、５～28の石鏃24点があり、先端部および脚部を欠損する資料がほとんどである。基部および脚部の形状から４つに分類が可能である。５～８は基部がわずかにカーブを描いており、脚部を形成しつつあるものである。（Ⅰ類）　５は大形の石鏃で安山岩製である。６は左側縁部が内湾意味にカーブを描いている。７は灰青色黒曜石で淀姫産である。８は裏面が先端部からの加撃によって剥がれており、使用時によるものである。９はNo12トレンチ表土出土である。（Ⅱ類）　10は完成品で灰青色黒曜石である。11は側縁部に鋸歯加工がみられる。12は表裏面ともに入念な剥離によって構成されている。13は全体を磨いた後に周囲から調整し仕上げた磨製石鏃である。14～18は脚部未端が丸いものをあげてみた。（Ⅲ類）　14は先端部と脚部を欠損している。15は表裏面ともに入念な剥離が行われている。16は脚部の抉りが深い。17は錐状に尖り、ねじれた先端部をもつ。脚部欠損している。18は小形の石鏃で、先端部に縞模様が認められる。19は幅広で脚部を欠損している。

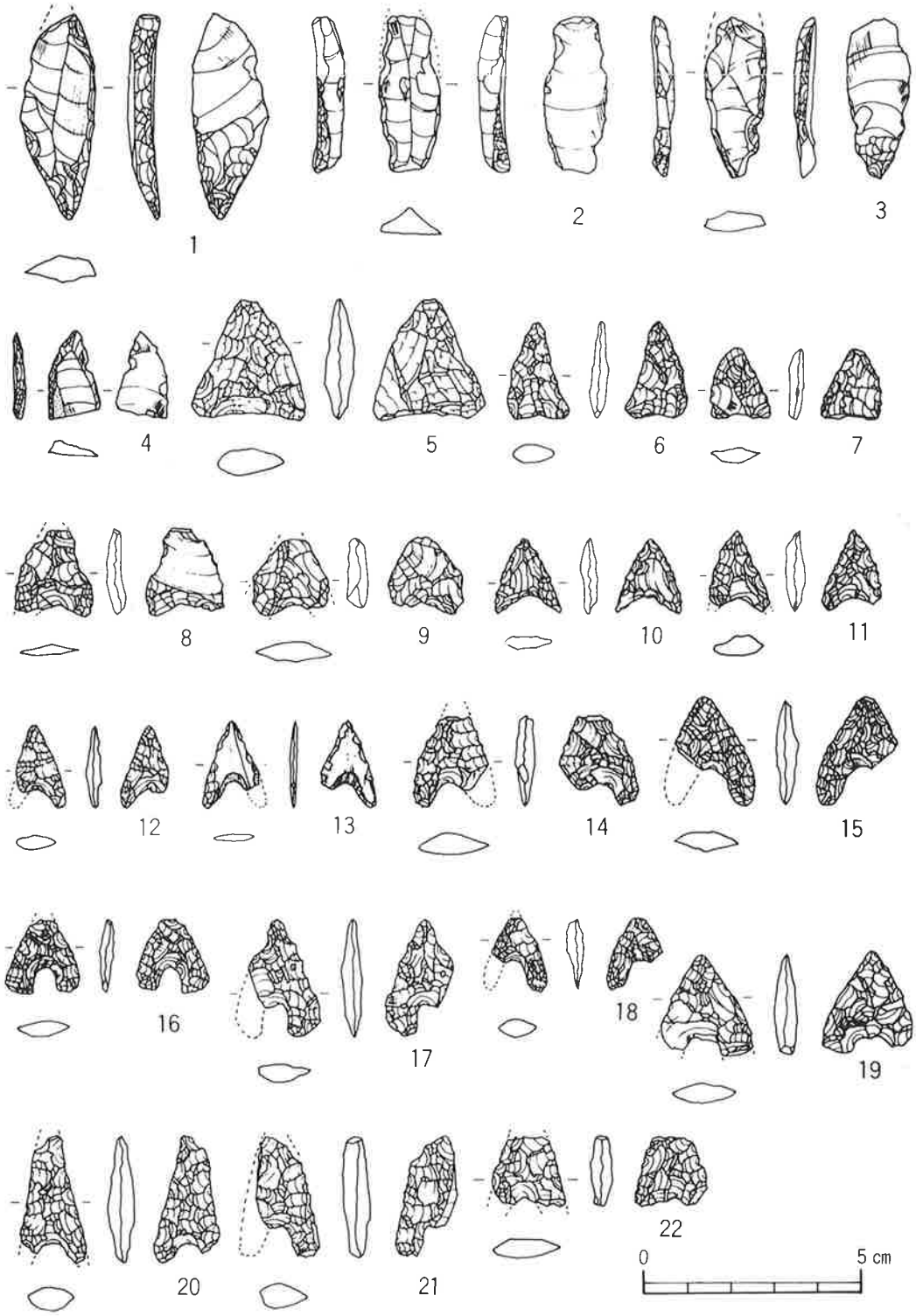


Fig. 20　下田遺跡表採遺物①（2／3）

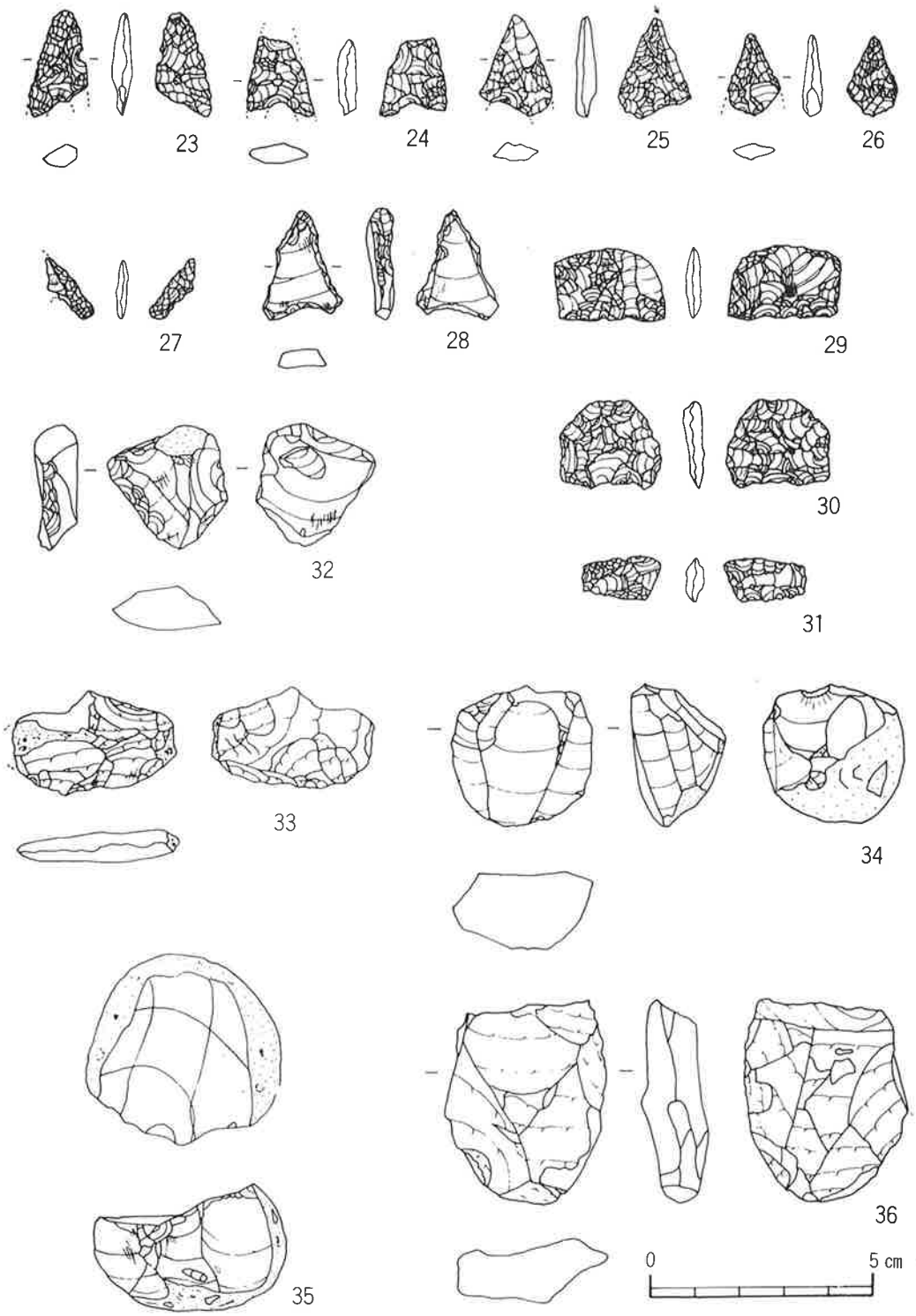


Fig. 21　下田遺跡表採遺物②（2／3）

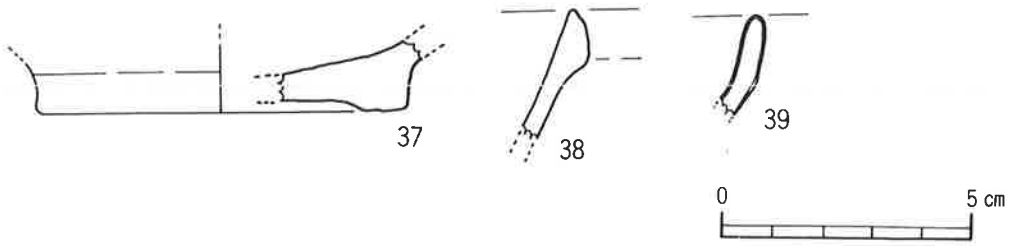


Fig. 22　下田遺跡表採遺物③（2／3）

20～26は側縁部が直線的で、先端角度が鋭利な縦長の石鏃である。（Ⅳ類）　20・21は厚みがあり、二次加工は丁寧に施されている。22は先端部と両脚部を欠損している。23は両脚部を欠損しているが、二次加工は丁寧である。24は二次加工は丁寧に施されている。25は先端部から側縁部にかけて２条の彫刻刃面を作り出している。26は先端部のみの石鏃で、27は脚部のみの資料である。28は未製品と思われるがその加工はブランティングに類似している。29は石鋸で、両面とも全体に周辺部から加工を施している。側縁部には鋸歯状の刃部を形成しており、裏面に第一次剥離面を残している。№２トレンチ内の畑より採集。30・31はサイドブレイドである。30は直線状に延びる刃部に対して、他の面から弧状を呈し、半月形状になるものである。両面とも全体に平坦剥離を施している。31は小形で先細りになるものである。断面は凸レンズ状を呈する。32は左側縁部に加工痕のある剥片で、厚手の剥片を利用している。表面に自然面を残している。33は横型石匙である。つまみ部全体を欠損しているが、刃部には極めて丁寧な二次加工を施している。34は小円礫を利用し、加撃を加えて打面部を作り出し、打面部から剥離作業を行っている石核である。細石核のブランクの可能性がある。全面パティナに覆われており、裏面には自然面を有している。35も同じ小円礫を利用し、１回の加撃で打面部を作り出している。打面部から剥離作業を行っており、目的の剥片がえられないため放棄したものである。剥離面には縞模様が顕著に認められる。36は安山岩製のスクレイパーである。右側縁部に刃部と考えられる加工が施されている。37～39は中世期の遺物で、37は白磁碗の高台部である。釉は淡白色で胎土は褐灰色で黒斑がある。38は白磁で玉縁口縁をもつ碗である。釉は白色で胎土は淡白色である。39は青磁で小碗の口縁部である。

以上、表採および耕作土出土の資料を述べたが、１・３のナイフ形石器は、興味ある資料であり、今後資料の増加を待ちたい。

Tab. 4　表採遺物計測表

〈 〉は推定値

図版番号	器種	石質	大きさ (cm) 全長	大きさ (cm) 全幅	重さ (g)	先端角度
Fig 20－1	ナイフ形石器	黒色黒曜石	〈4.7〉	1.65	4.9	
2	〃	〃	〈3.6〉	1.35	2.4	
3	〃	〃	〈3.5〉	1.37	3.3	
4	〃	〃	〈1.98〉	〈1.17〉	0.7	
5	石鏃	安山岩	2.7	2.58	3.8	60°
6	〃	黒色黒曜石	2.2	〈1.45〉	0.9	45°
7	〃	灰青色黒曜石	〈1.64〉	〈1.4〉	0.8	55°
8	〃	黒色黒曜石	〈1.92〉	1.65	1.2	62°
9	〃	〃	〈1.72〉	〈1.7〉	1.4	65°
10	〃	灰青色黒曜石	1.7	1.55	0.6	60°
11	〃	黒色黒曜石	〈1.7〉	〈1.38〉	0.8	60°
12	〃	〃	1.88	〈1.07〉	0.5	45°
13	〃	〃	2	〈1.33〉	0.3	50°
14	〃	〃	〈2.16〉	〈1.78〉	1.4	48°
15	〃	〃	2.45	〈1.76〉	1.5	70°
16	〃	〃	〈1.65〉	〈1.67〉	0.7	52°
17	〃	〃	2.65	〈1.6〉	1.2	55°
18	〃	〃	〈1.67〉	〈1.27〉	0.5	60°
19	〃	〃	〈2.35〉	〈2.13〉	1.8	67°
20	〃	〃	〈2.9〉	〈1.46〉	2	23°
21	〃	〃	〈2.74〉	〈1.45〉	2.1	50°
22	〃	〃	〈1.55〉	〈1.67〉	1.2	40°
Fig 21－23	〃	〃	〈2.38〉	〈1.3〉	1.2	27°
24	〃	〃	〈1.8〉	〈1.5〉	1.2	27°
25	〃	〃	〈2.28〉	〈1.7〉	1.3	50°
26	〃	〃	〈1.9〉	〈1.15〉	0.7	50°
27	〃	〃	〈1.35〉	〈1.1〉	0.2	
28	〃	〃	2.5	1.8	1.9	60°
29	石鋸	〃	1.64	2.46	1.6	
30	サイドブレイド	〃	2.03	2.26	2.4	
31	〃	〃	0.95	1.8	0.8	
32	加工痕のある剥片	〃	2.8	2.75	7	
33	石匙	安山岩	2.4	3.7	6.1	
34	石核	黒色黒曜石	3.18	3.2	23.5	
35	〃	〃	2.8	4.4	53.3	
36	スクレイパー	安山岩	4.6	3.7	27.3	

Ⅶ　調査のまとめ

下田遺跡の発掘調査は、地域運動場計画に先だって昭和61年度文化財保存整備事業として範囲確認調査を実施したものである。当遺跡が所在する星鹿半島一帯には８か所（大崎免を除く）に黒曜石原石が散布している。原産地の科学分析は九州各地の原産地黒曜石試料との化学組成の対比が行われており、牟田の黒曜石が分析されている。しかし、半島一帯の同一原産地内での産地分析が行われておらず今後に残された問題である。星鹿半島一帯の原石は、腰岳産の原石が角礫なのに対して、小形の円礫あるいは楕円形状を呈しており、角礫はみあたらない。原石は比較的薄く細長い剥片を生産するのに適しており、台形石器、ナイフ形石器、彫器等の素材として利用されている。日ノ岳遺跡においては、３層より２層が、淀姫産より牟田産の原石を利用した割合が高く、腰岳産の原石は量的には非常に少ないとのことである。これはより良質の剥片を求めて行く過程で牟田産原石を有効に利用するために均一化した剥片の剥離を可能にしたことにあると思われる。発掘した面積は187㎡の狭い範囲であったが調査区南側において良好な旧石器時代の文化層が検出された。№12トレンチ２層・３層には、裏面基部に平坦剥離を行っている台形石器があり、柿崎遺跡のナイフ形石器に類似している。表採資料のナイフ形石器にも裏面基部に平坦剥離が行われているが、その時間的な位置づけについては、資料が貧弱であり、明確にすることはできない。表採資料には石鋸、サイドブレイドの縄文後期から晩期にかけての資料があるが、土器の出土は１点もなかった。

井戸状遺構および竪穴については、短時間の間に土を入れるという順序ある人為的な埋め方をしたものではないが現在までにはさほどの時間的経過がないと思われる。しかし、発掘作業に従事した人や、近所の人達の話からしてもこの井戸状遺構に関しての記憶は見い出せず、遺物には覆土内から２点があった。この井戸状遺構および溝状遺構、竪穴の製作された時期については、推測の域を出なかった。竪穴の使途については物の貯蔵を目的としたものであろうと考えている。

最後に約１ヶ月間の発掘調査であったが、無事調査を終える事ができました。本報告書の刊行にあたっては、多くの方々の御協力によるものであります。ここに記して感謝を申し上げます。

付編　星鹿周辺の地名と歴史

星鹿の地名が文献に登場するのは、鎌倉時代の元軍襲来に関する『都甲文書』からである。弘安９年３月日の豊後国御家人都甲左衛門五郎大神惟親法師軍忠状に「右、蒙古凶徒、着岸肥前国鷹島之間、雖向当国星鹿、彼七日〈巳時〉寂妙渡当島、於東浜依致合戦忠、寂妙子息四郎惟遠令分取畠とある。弘安の役（1281）の際の鷹島合戦では、星鹿が日本軍の拠点となっていたようである。また、『五條文書』弘安７年４月12日の「筑後国木小屋地頭番西小太郎度景申弘安四年閏七月五日於肥前国御厨子崎海上、蒙古賊船三艘内、追懸大船致合戦」と、『武雄神社文書』永仁４年８月日の肥前国御家人黒尾社大官司藤原資門軍忠状に「右、異賊襲来之時、於千崎息乗移干賊船、資門乍被疵生虜一人」とあり、星鹿の沖（千崎沖）で海上戦が行われ、多くの戦死者が出たようである。これらの鷹島付近での合戦の様子は、『竹崎季長絵詞』にも詳細に述べられている。

文永の役（1274）、弘安の役（1281）２度に渡る元軍の襲来によって、松浦地方が大打撃を受けたことは明らかであり、この元寇にまつわる地名も残っている。追出、逃ノ浦、血田、血田辻などが小字名として残っており、「大堂」の森に戦死者たちの塚をつくり、供養した千人塚が６基ほど残っている。

近世においては、星鹿村は平戸藩領の一部で、田平筋に属していた。村高は、「慶長９年（1604）平戸分領并壱岐嶋田畠惣目録」373石余、「元禄12年（1699）郷村帳」289石余、「天保５年（1834）天保郷帳」793石余、「明治元年（1868）旧高旧領取調帳」1,311石余。「元禄12年郷村帳」では星鹿村の項に親村と肩書があり、星鹿村枝村として岳崎村の名と村高84石余が記してある。また、星鹿村の浦として星鹿浦・川原辺田浦の名も記している。同じく「天保郷帳」でも231石余と記してある。岳崎村は「元禄郷村帳」・「天保郷帳」でも独立した村として見えることから、江戸時代初期には星鹿村のうちに含まれていたが、江戸前期までに星鹿村から分村したことがわかる。「旧高旧領取調帳」では星鹿村の村高には、岳崎村の名が見えず、星鹿村のうちに含まれているとみられ、幕末・明治維新期までに再び星鹿村に編入されている。明治４年平戸県を経て、長崎県に所属する。同11年北松浦郡に属す。同７年星鹿小学校、同８年青島分教場が開設している。同16年の「郡村誌」によれば、村の幅員は東西約15町、南北約34町あり、村内には岳崎免・下田免・牟田免・北久保免・青島免に分かれ、税地は米459石余、戸数559戸、人口は男1,151・女1,161の計2,312人とある。学校は字小橋に星鹿小学校、青島に青島小学校があり、神社には村社の神園神社・熊野神社・七郎神社・姫神社・綿津見神社・木元神社・平野神社・南市神社・素盞嗚神社がある。寺院では浄土宗西方山浄土寺が記載してある。

近代においては、明治22年市制町村制施行により星鹿村となり、岳崎免に村役場を設置しており、昭和15年まで北松浦郡の自活体名となっている。大字は編成されずに、北久保免・牟田

免・下田免・岳崎免・青島免の行政区となっている。明治24年の『徴発物件一覧表』によると東西８町、南北１里13町、戸数543、人口2,427人とある。同30年星鹿村共同販売所（魚市場）が開設、同38年星鹿郵便局開通、同45年いわしさし網が導入。大正６年川原辺田缶詰製造所開設。同４年の戸数503、人口2,891、同９年世帯数556、人口2,811、昭和10年世帯数538、人口2,917。昭和16年１月１日新御厨町の一部となり、星鹿村制時の各行政区は、新御厨町の行政区に継承されている。

昭和30年新御厨町・志佐町・調川町・今福町が合併して松浦市となり新御厨町のうち旧星鹿村の地域を星鹿町と冠称している。北久保免・牟田免・下田免・岳崎免・青島免の行政区がある。世帯数・人口は昭和45年687・3,083、同55年687・2,997。同37年に星鹿城山・青島が北松県立公園に指定されている。

昭和43年導入されたハマチ養殖は、星鹿・川原辺田を中心として発展し、県下を代表する漁獲高をあげているが、近年魚価の低迷、養殖による港内の汚染によって養殖筏が沖合に移動している。星鹿ジャンガラは、昭和47年に市の無形民俗文化財に指定されている。

〈参考文献〉

松浦市史編纂委員会　『松浦市史』　1975

松浦党研究連合会編　佐賀県史料集成（抜粋）　『松浦党研究第５号』　1983

浄土寺境内で行われる星鹿ジャンガラ

PLATES

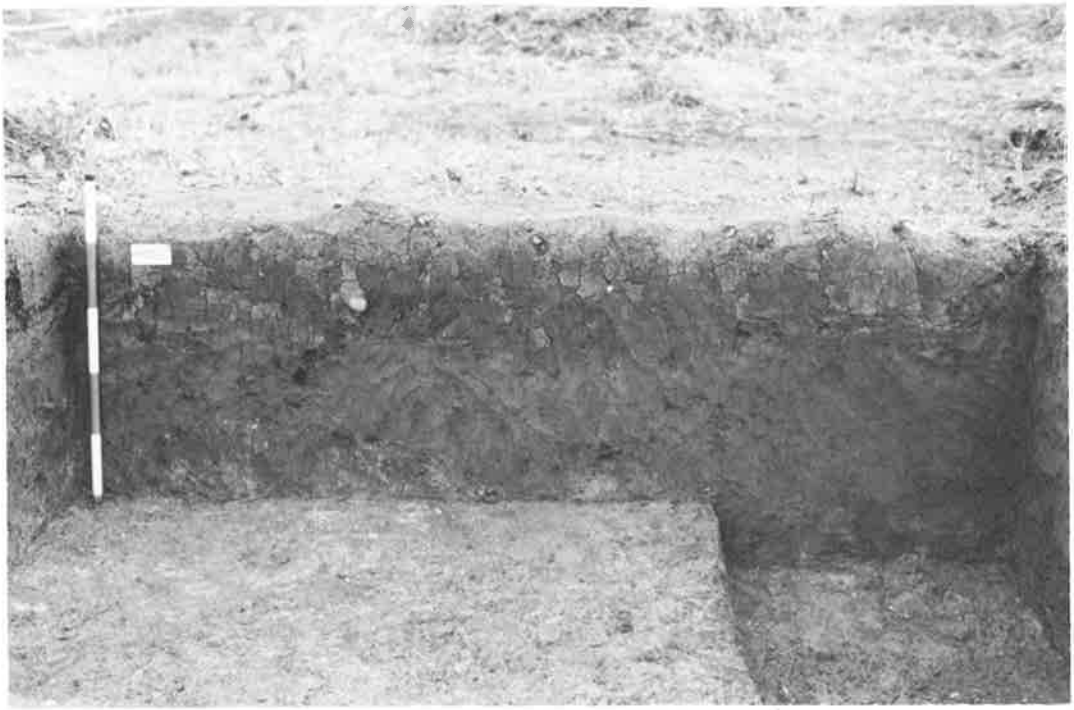
ＰＬ．１　遺跡遠景（星鹿城山より）

ＰＬ．２　調査風景

ＰＬ．３　No12トレンチ土層状況

ＰＬ．４　No13トレンチ土層状況

ＰＬ．５　No14トレンチ土層状況



ＰＬ．６　No15トレンチ土層状況

ＰＬ．７　井戸状遺構検出状況

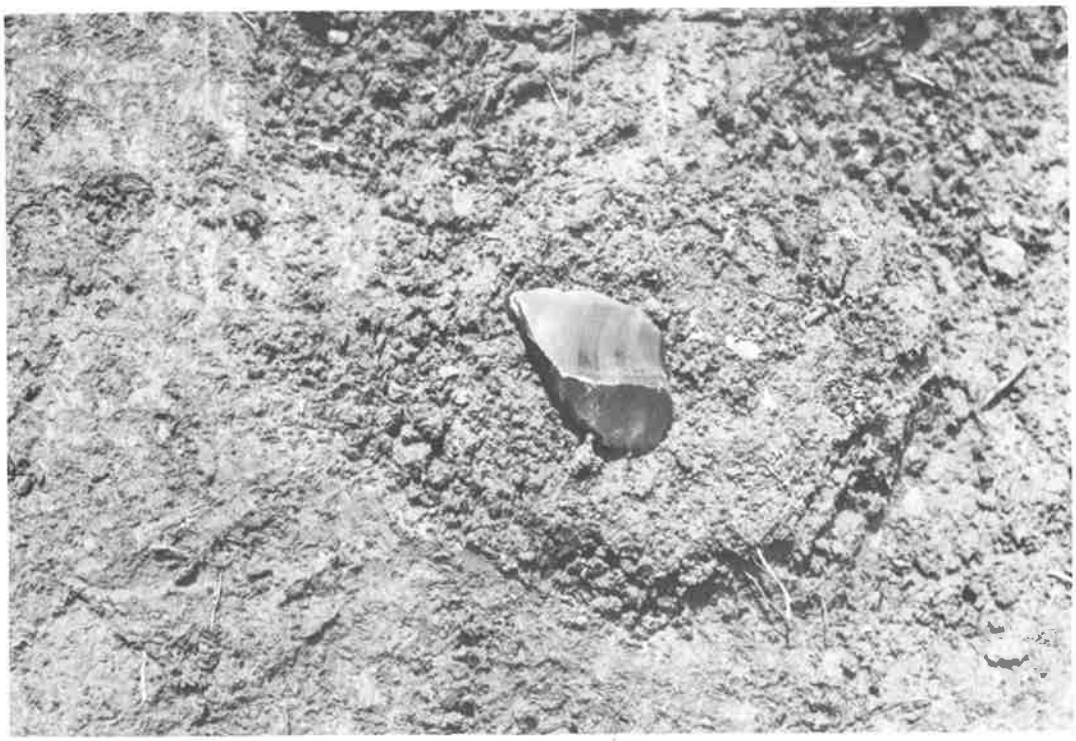
ＰＬ．８　井戸状遺構検出状況

ＰＬ．９　井戸状遺構検出状況

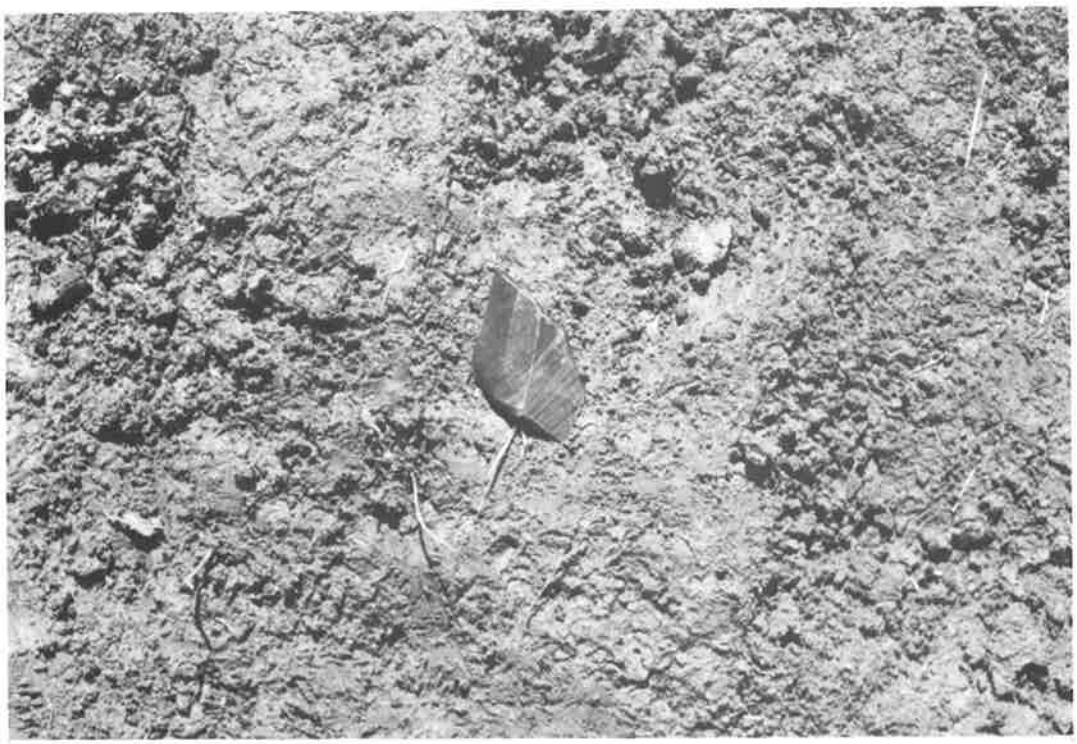
ＰＬ．10　井戸状遺構検出状況

ＰＬ．11　溝状遺構検出状況

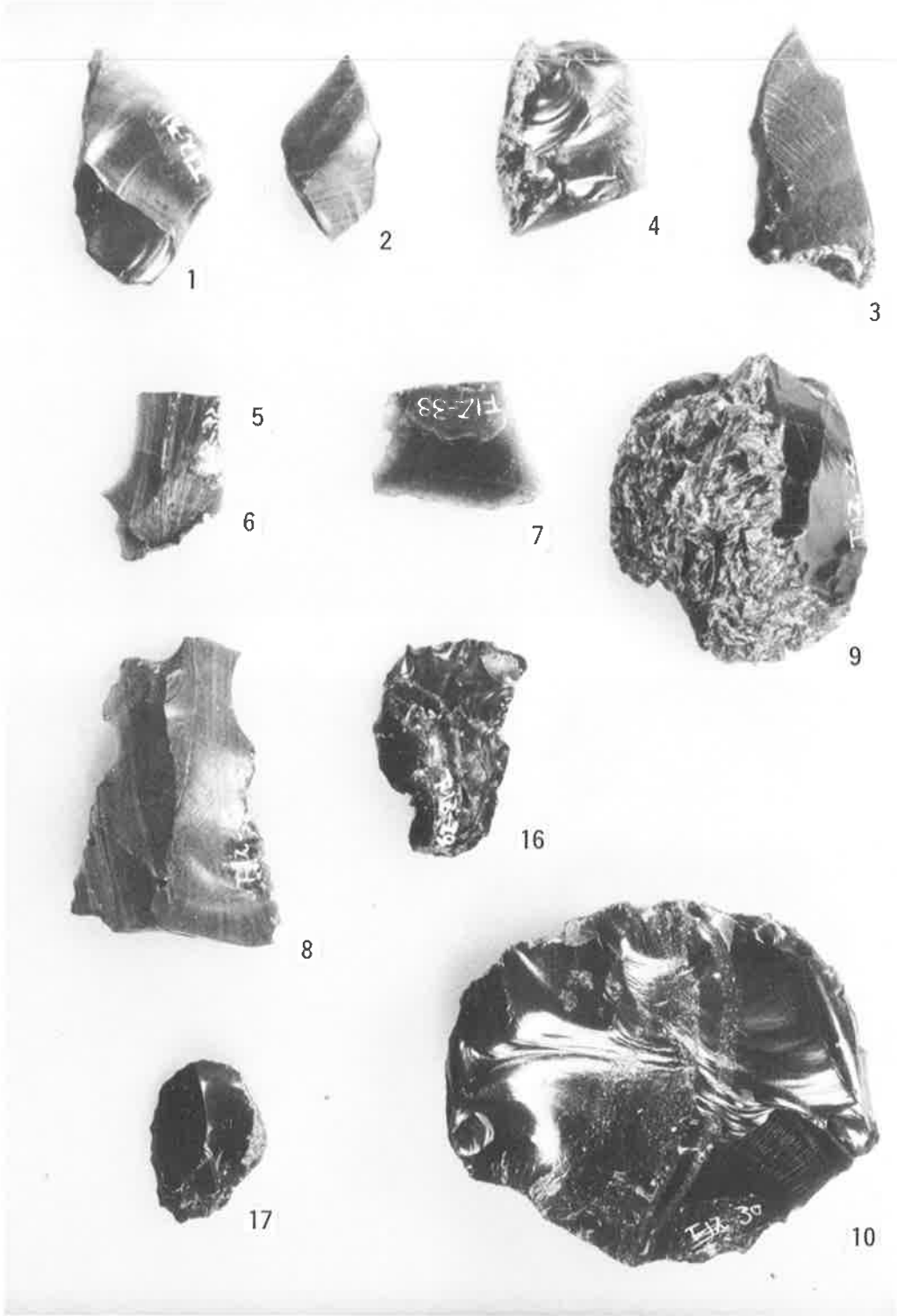
ＰＬ．12　溝状遺構・竪穴検出状況



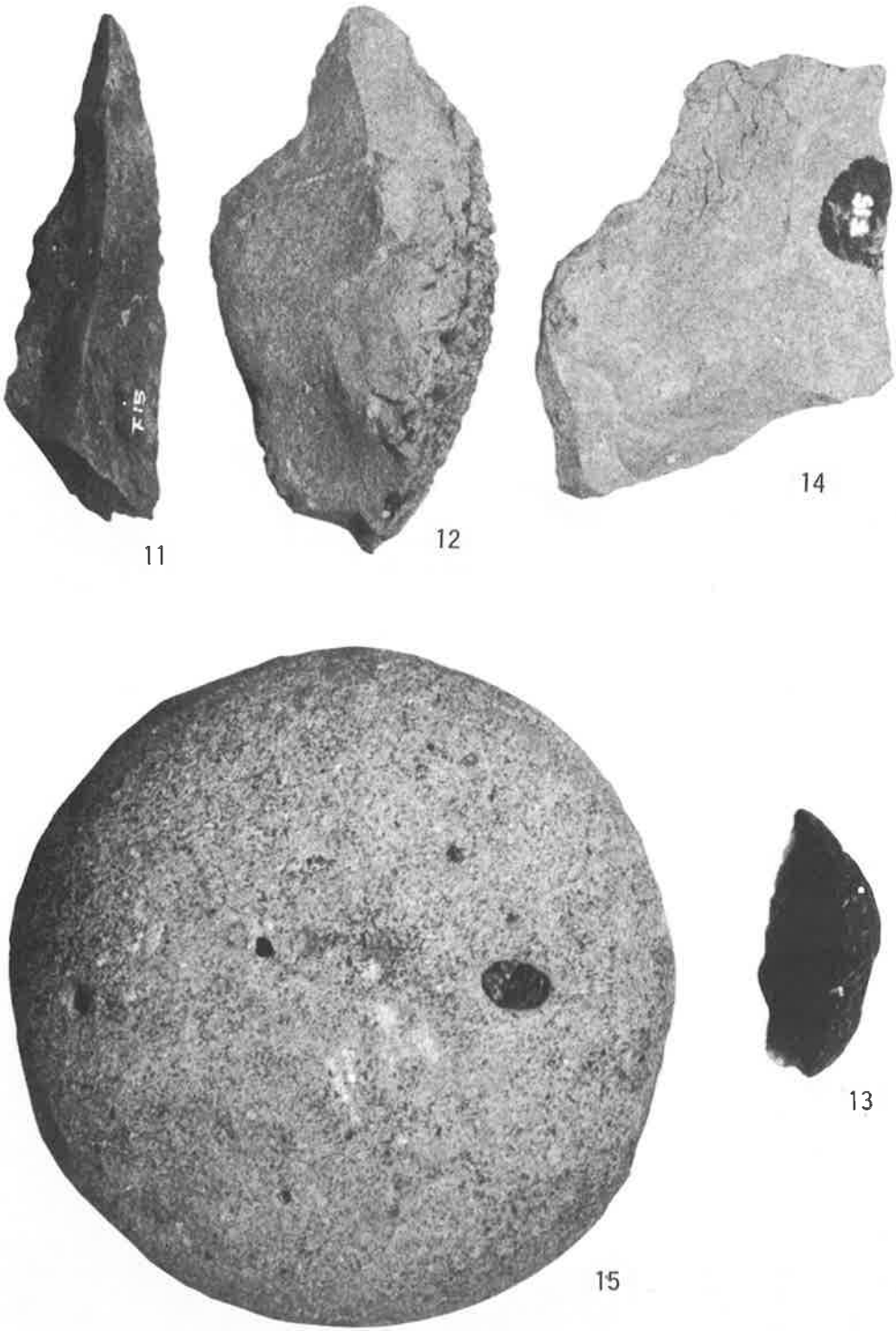
ＰＬ．13　遺物出土状況



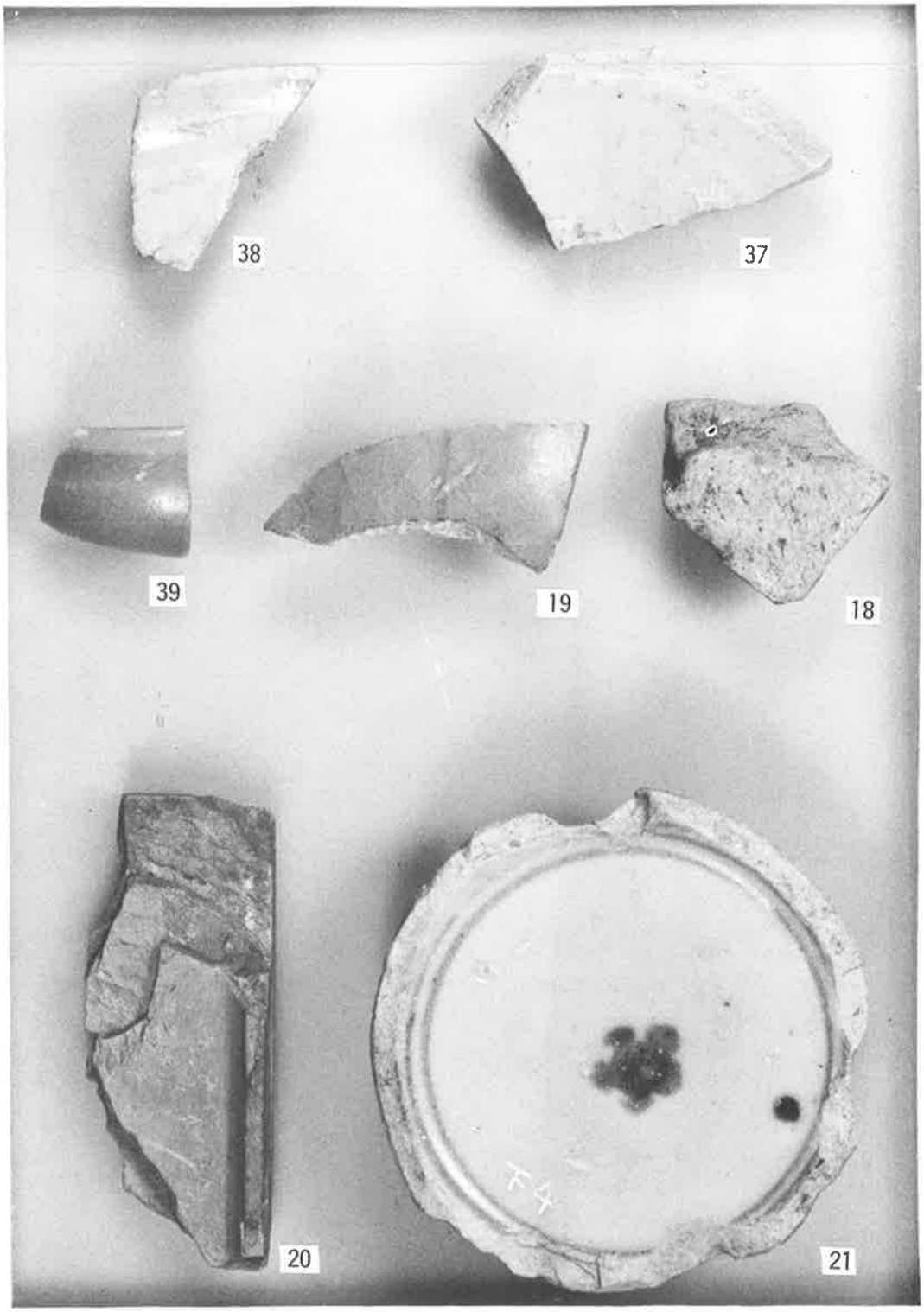
ＰＬ．14　遺物出土状況



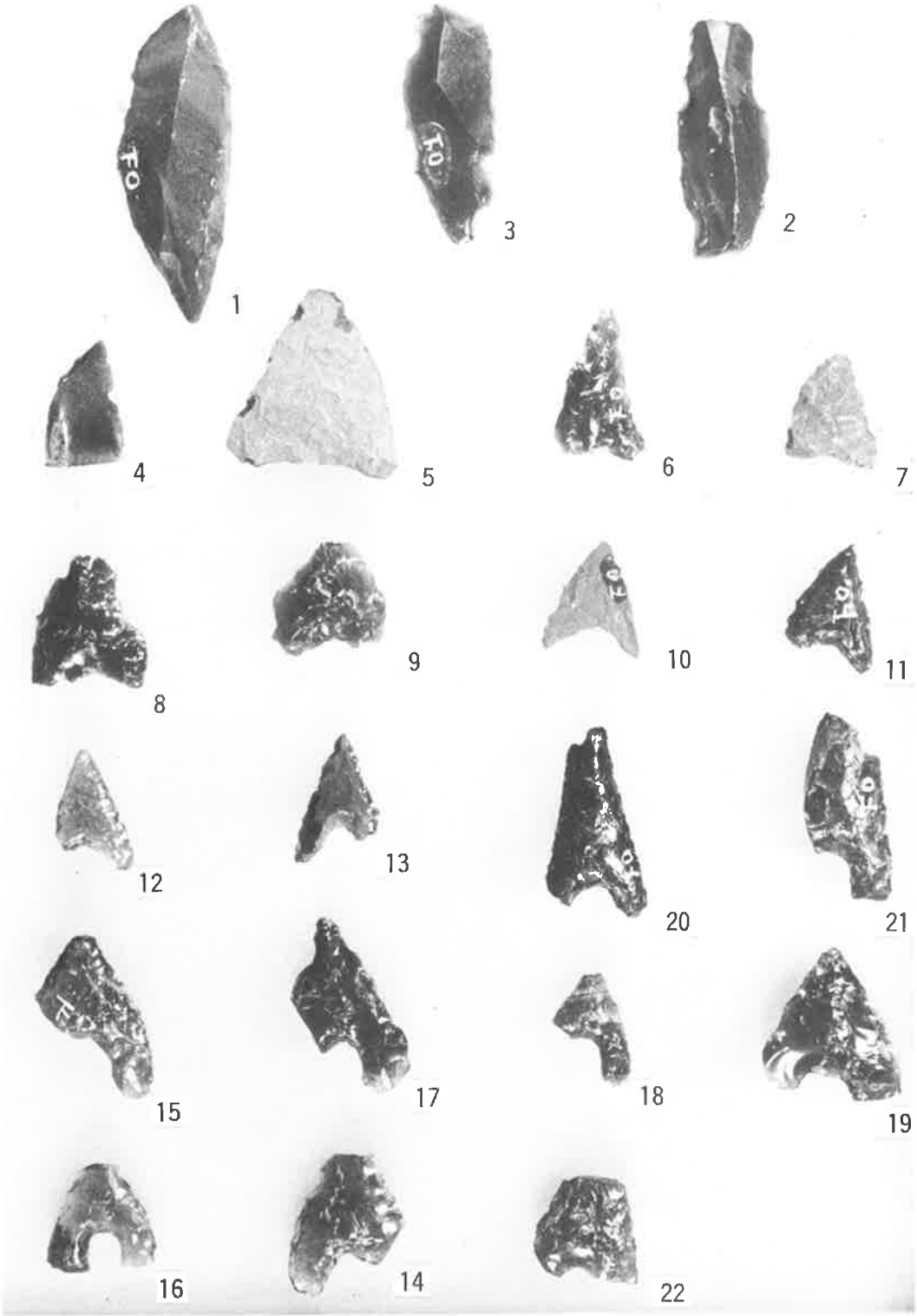
ＰＬ．15　出土遺物（1／1）



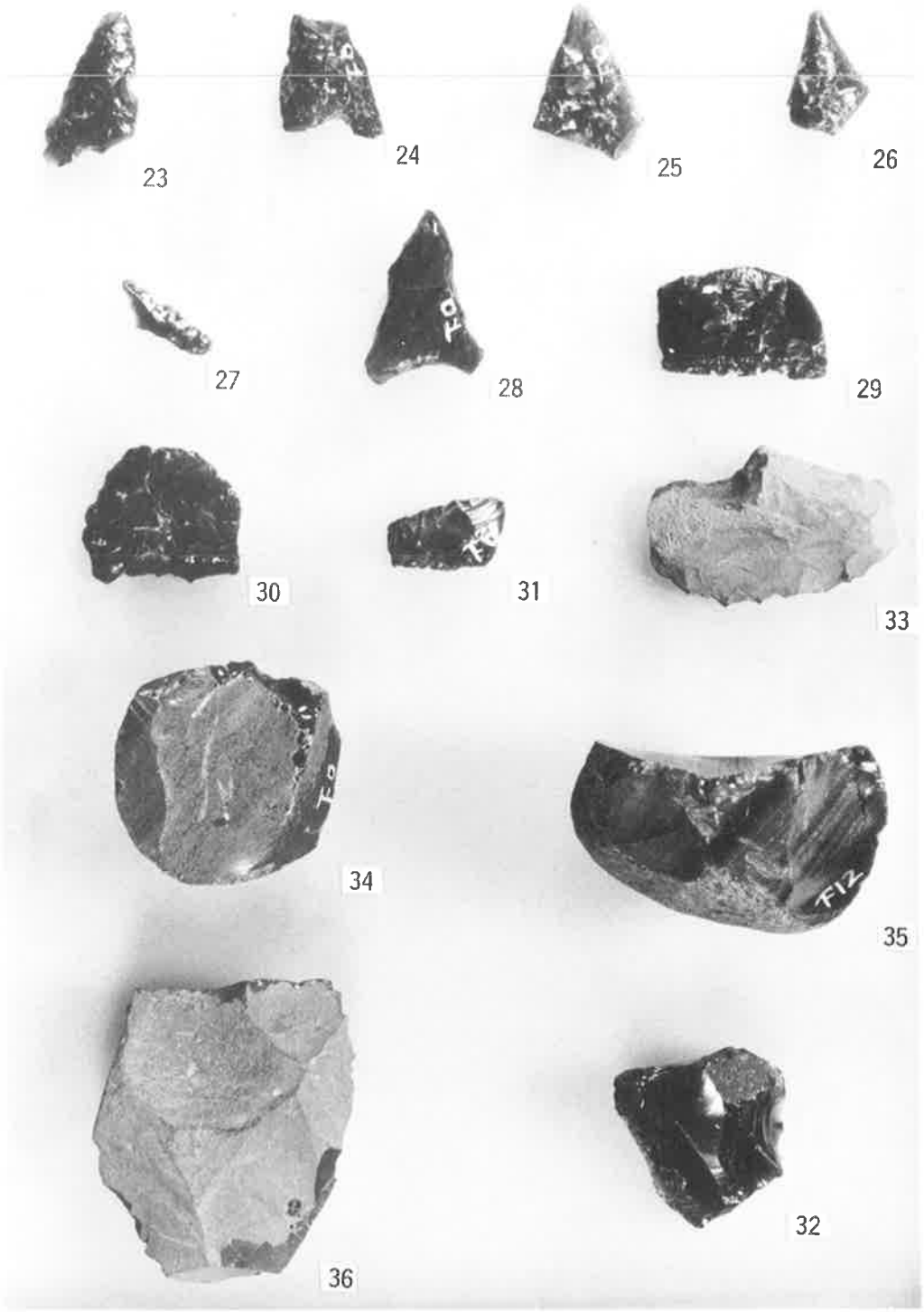
PL. 16　出土遺物（1／1）



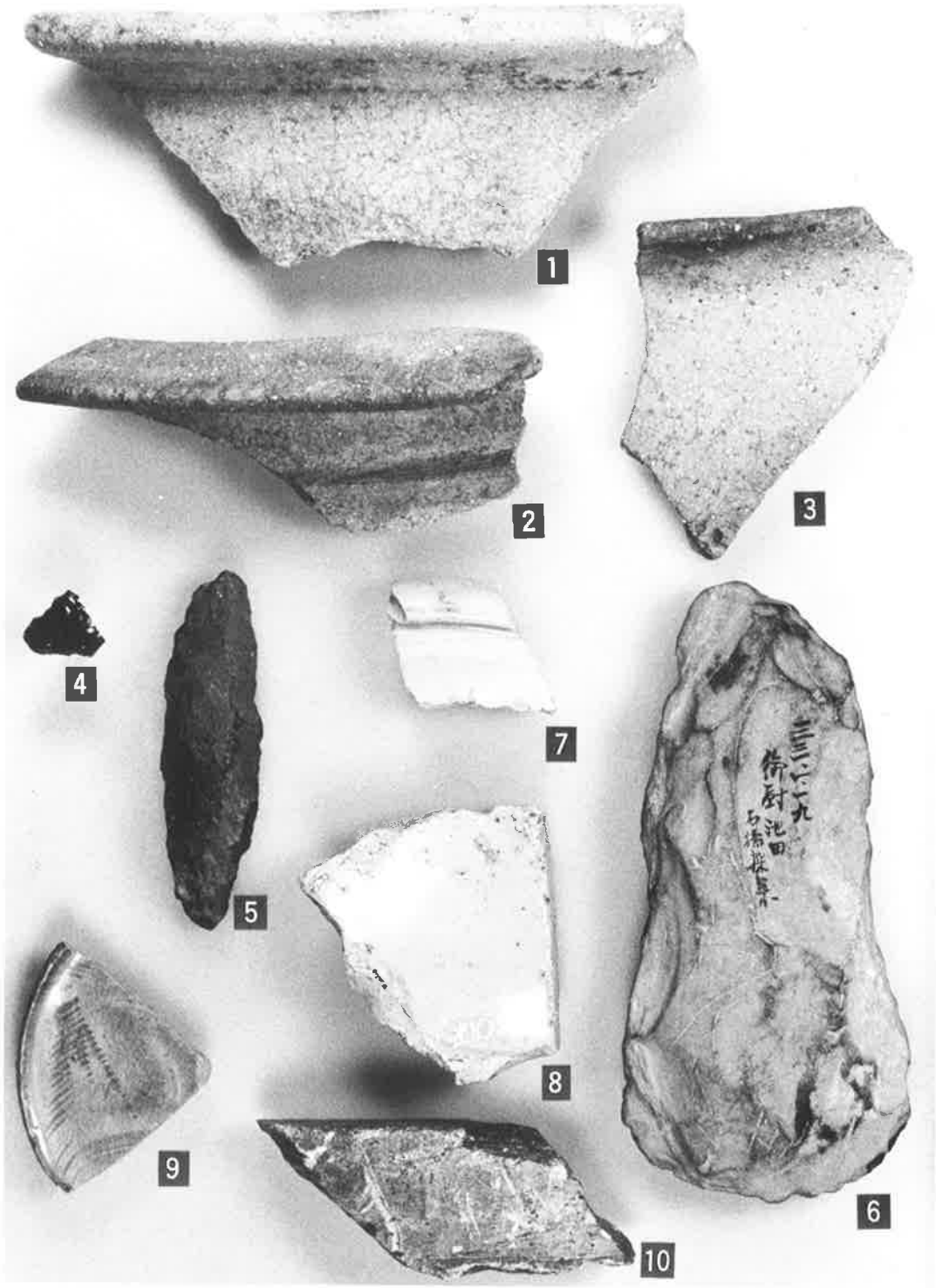
ＰＬ．17　出土遺物、表採遺物（1／1）



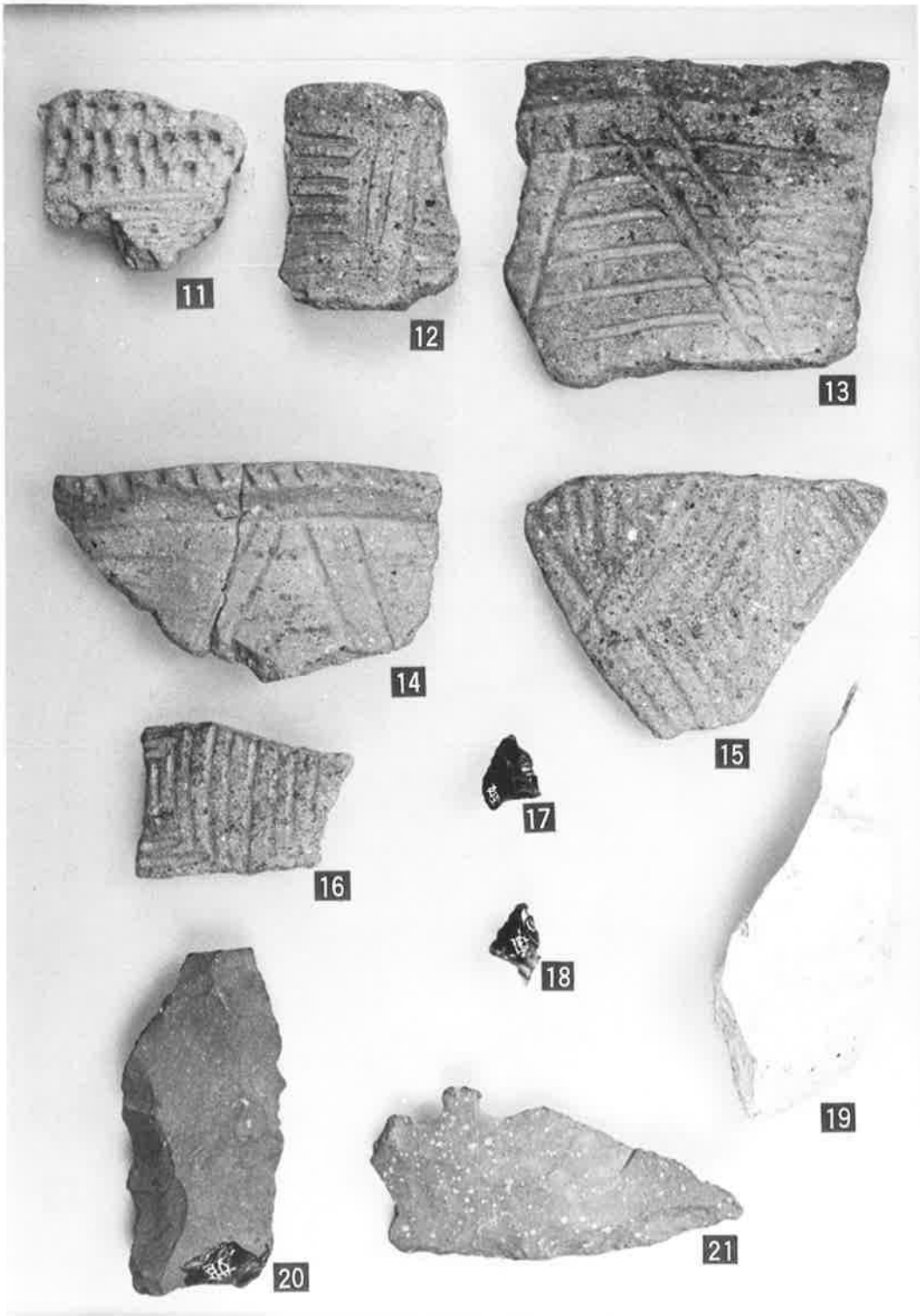
PL. 18 表採遺物（1／1）



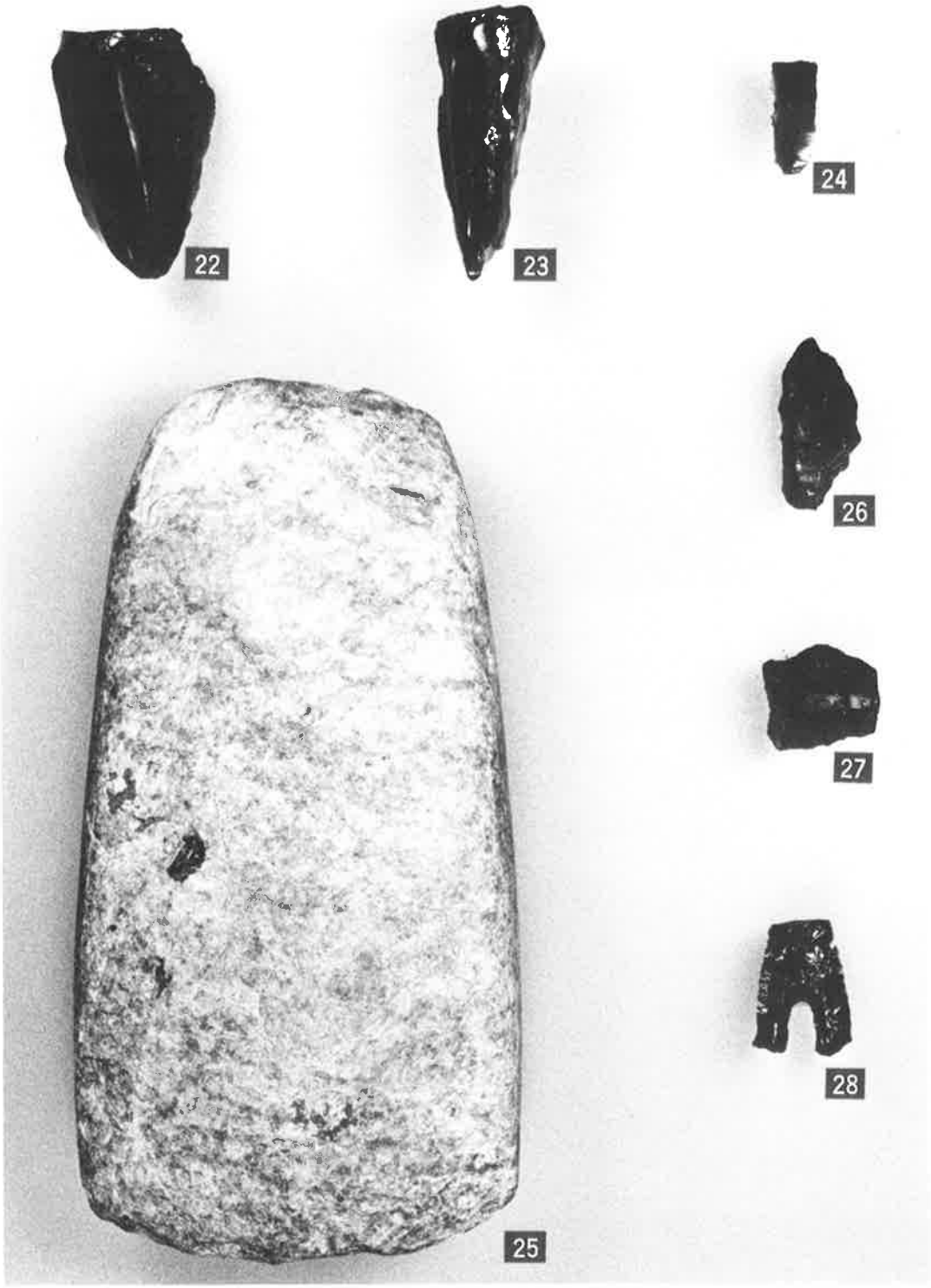
ＰＬ．19　表採遺物（1／1）



ＰＬ．20　周辺遺跡出土遺物（２／３）



ＰＬ．21　周辺遺跡出土遺物（２／３）



ＰＬ．22　周辺遺跡出土遺物（1／1）

ＰＬ．23　星鹿半島津崎一帯

ＰＬ．24　星鹿千人塚

ＰＬ．25　墓址検出状況

ＰＬ．26　埋めもどし風景

ＰＬ．27　発掘に参加した人々

松浦市教育委員会発行文化財調査報告書一覧

1　正林護　『栢ノ木遺跡（中間報告）』　1973
2　倉田芳郎編　『長崎　松浦皿山窯址』　1982
3　中田敦之　『牟田池上遺跡』松浦市文化財調査報告書第１集　1984
4　安楽勉　中田敦之編　『楼楷田遺跡』　1985
5　中田敦之　『松浦市の文化財』　松浦市文化財調査報告書第２集　1987
6　中田敦之　『下田遺跡』　松浦市文化財調査報告書第３集　1987

松浦市文化財調査報告書　第３集

下　田　遺　跡

発行　〒８５９－４５
松浦市志佐町里免365番地
松浦市教育委員会
印刷　中川印刷株式会社